

公開自主講座 「宇井純を学ぶ」

井上 真 小林 和彦 原田 正純 淡路 剛久 桜井 国俊 最首 悟
(東京大学) (東京大学) (熊本学園大学) (早稲田大学) (沖縄大学) (和光大学名誉教授)

吉岡 斉 宮内 泰介 三輪 大介 友澤 悠季 山下 英俊 鬼頭 秀一
(九州大学) (北海道大学) (京都精華大学大学院) (京都大学大学院) (一橋大学) (東京大学)

井上 それではただいまより公開講座「宇井純を学ぶ」をはじめさせていただきます。本日は、真夏のような陽気にもかかわらず、これだけ多くのみなさまにこの安田講堂に足を運んでいただきまして誠にありがとうございます。私、大学院農学生命科学研究科農学国際専攻の井上真と申します。本日の総合司会を務めさせていただきます。

委員長の開会の挨拶の前に、簡単に経緯を説明させていただきます。実は昨年(2019)の12月に私の同僚の小林和彦さんから相談を受けました。宇井先生関連のシンポを東大でやるという話が持ち上がっているが、どうしようかと。そのとき、私はとてもびっくりしたわけです。なぜかといえますと、私自身は本日の共催であります日本環境会議の理事のメンバーとして、宇井先生とともに岩波書店の『環境と公害』及び東洋経済新報社から出している『アジア環境白書』シリーズの企画・編集に携わってまいりました。まさか同僚の一番すぐ近くにいる教員が宇井先生となんらかの関わりをもっているということは思ってもいませんでした。それから我々の話が進みました。それである意味では、「小林さん、あなたもか!」というふうな雰囲気はびっくりでした。それで、若い人たちのためにむしろ積極的に我々東京大学の教員がやるべきではないか、やろうということで一致しまして、新領域創成科学研究科の鬼頭秀一さんに声をかけて、三人で一月に第一回目の打ち合わせを行いました。そして、私たちの趣旨に賛同してくれる東京大学の教員の有志を募って、小林委員長、そして鬼頭、井上副委員長とする12名で実行委員を立ち上げたわけです。それが二月のことであります。同時に一橋大学の山下英俊さんに事務局として参加していただきました。

私にとってはこの実行委員会での議論、そしてその後引き続いて行われる懇親会での議論というものが非常に有意義で勉強になりました。そういう意味で、宇井純を学ぶという重要な作業というのは、今年(2020)の一月あるいは二月の時点からすでに始まっていたということになります。そのような事情によって、私が進行役を務めることに致しました。もちろん、アナウンサーのようにスムーズにはいきません。むしろ言語障害を起こすこともありますけども、どうかご容赦ください。なお、登壇いただく先生方の紹介には敬称を使用せず、また内と外との区別もせず、「さん」づけで統一させていただきますので、この点もご了解いただきたいと思っております。

それでは、まず開会の挨拶です。主催者であります公開自主講座実行委員長、東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻教授の小林和彦さん、お願いします。

小林 公開自主講座「宇井純を学ぶ」をこれからはじめ

ます。はじめますにあたって、私どもがどういうことを考えてこの公開自主講座をやると思ったかを少し説明したいと思っております。

先ほど、井上さんの方から紹介がありましたが、当初宇井純さんを偲ぶというような企画だったのですが、なにかそういうことはあまりやりたくないな、という感じがしたのです。やはり、よくよく考えてみますと、宇井さんは

私は30年くらい前に、ここ東大の工学部で自主講座公害原論をやっていたときに実行委員をやっていたのですが、宇井さんっていうのは、いろいろ気になる言葉をすごく残しているのです。そのときは必ずしも実行委員として素直には受け止められなくて、むしろどちらかという宇井さんみたいな人にはなりたくないなと、そんなふうにも思っていたわけです。

ただ、いま30年後にいろいろな事情で、宇井さんが非常に糾弾していたここ東京大学の教員になってみると、宇井さんが言っていた気持ちや言葉が心の中によみがえってくるというか、気になってくるのです。気になってくることの中には、「現場へ行け」とか、「足で歩いて」とか、そういうことがありました。実行委員のときは「また言っている」みたいな感じで、「耳にタコができちゃうよ」などとも思っていたのです。けれども、いまになってみるとやはり、

私は農学部なのですが、実際に現場に行くと何がそこで起こっているのか、その人は何を考えているのかということからはじめないと、本当のことはわからないなと常々思っています。そういう形では、自分の中に宇井さんの言っていたことが残っているという感じがします。ただ、宇井さんの残した言葉の中には、「公害に第三者はいない」、あるいは「住民が作る科学」など、いまの自分にとっては必ずしもそのまま受け止められないものがあります。自分がいまやっている農学の研究。あるいは私自身が行っているのは地球環境変化が食料や生態系にどう影響があるのかということをやっているわけですが、そういう者からすると、率直なところまだかなり距離があると感じます。

ですが、宇井さんの、なんといいですか、迫力で書かれた言葉というのは非常に気になって気になってしょうがないものですから、ぜひそれを勉強したいと思ひまして、私自身、非常にこの「宇井純を学ぶ」という機会に期待をしています。とりわけ、ご覧いただくとおわかりになりますように、どの先生もみなさん書物でしか拝見したことのないような先生ばかりですので、ぜひお聞きしたいことがいろいろあります。それから、とりわけ今日の趣旨は、若い人と一緒に学ぶ、あるいは若い人に元気を出してもらうことにあると思っております。宇井純さんのやったこと、

言ったことをもとに、とりわけ若い人たちがこれから環境とか開発とかの研究に元気を出してってもらいたいと、教員としては考えておりますので、皆さんも積極的に参加していただけるとありがたいと思います。

最後になりますけれども、この公開自主講座を開催するために多くの方にお世話になりまして、ありがとうございました。特に、宇井さんのご夫人の宇井紀子さんには大変ご協力いただきましてありがとうございました。これをもって開会の挨拶に代えさせていただきます。

井上 それでは講演会を始めたいと思います。本来ならばお一人一時間ずつくらい話をうかがいたいところですが、それをやっつけますとこの安田講堂に籠城するということになってしまいますので、時間の都合上 10 分ということでお願いしております。それでは、はじめに熊本学園大学教授、水俣学術センター長の原田正純さんをお願いします。演題は「宇井純と水俣病」です。

原田 宇井さんの会に私がしゃべるなんて非常に不思議な気がします。宇井さんとの関係はもちろん水俣病を通じてですが、二人の関係はどういう関係だろうと一生懸命考えたのです。先輩後輩とは違うし、ちょっと古めかしい言葉で、若い人からは笑われるかもしれないですが、戦う戦友みたいな言葉が合うのかなと思っております。それはもちろん企業や行政と一緒に戦ったということだけではなく、自分自身に対する戦いでもあったわけです。そういう意味で宇井さんとは本当に近い。大学も違うし分野も違うし、生まれも育ちも違う。けれども、水俣病を通じて戦う仲間として、非常に大きな存在として、今日まで、いやおそらく私が生きている限りは、私の中に残っていくのではないかと思います。

水俣病は正式に発見されて今年で 51 年になります。そのちょっと後くらいに、私が現場をウロウロしていたわけです。その頃、「いま東京大学の大学院生が資料を漁ってゴソゴソやっている。こいつは何をするかわからないので用心するように」とよく言われました。大学の中で、誰からか用心しろという伝令がきたのです。いま考えてみると、それが宇井さんだったのです。おそらくその頃、水俣を三人くらいの方がウロウロしていたのです。一人はカメラマンの桑原さんで、それからもう一人は作家の石牟礼さん、石牟礼さんと桑原さんと宇井さん、この三人が水俣を徘徊していたのです。三人に警戒しろと言われたことを覚えています。

宇井さんと初めて、意識して付き合ったのは第一次訴訟が始まってからです。宇井さんが亡くなって一番悲しかったのは、第一次訴訟の水俣の原告たちだと思います。原告たちももう年をとりまして宇井さんと一緒に戦った連中がたくさん亡くなってしまったのですが、まだ濱元二徳をはじめ何人かは宇井さんのことを一番悲しかったと思っております。

水俣病が今日に至っても解決していないのは、これほどの社会的な大事件を、医学という非常に狭い枠に閉じ込めてしまって、その中でこれをなんとかしようとした。それが間違いだったと宇井さんがよく指摘していました。確かに、一つの狭い分野でこの水俣病事件というものを閉じ込めてしまったということが、解決を遅らせた理由だと私もいま思っております。

これをなるべく広げて解放していこうとした人が、宇井さんだったと思います。ご承知のように、飛んだ野郎ではないけれど、富田八郎と書いて「とんだやろう」と読むのですが、合化労連の機関紙『月刊合化』で宇井さんが水俣病のことを研究していました。これがおそらく水俣病の歴史の中で、医学以外で総合的に水俣病のことをとりあげた最初の研究だと思います。それを私たちがずっと後になって利用させていただいて、裁判などに使ってきたという経過があります。そういう意味で、宇井さんは最も早くから総合的な研究を行っていたと思います。

そして裁判が起こりましたときに、真っ先に駆けつけきているいろいろな資料を提供してくれた。それが裁判に勝った一つの原因になったと、患者たちは宇井さんに感謝しております。例えば猫 400 号の問題だとかいろいろなことを

医学者というのは病気のことは知っているけれども、工場の中のことは知らないし社会の流れのことも知らなかったわけですから 教えてくれたという点で、水俣病の歴史の中で宇井さんの名前は残っていくと思います。新潟水俣病が起こったときも、いち早く宇井さんは協力されたときいております。水俣では裁判を起こしたものの、どうしていいのかわからず、右往左往したことがあります。そのとき私たちは水俣病研究会というものをつくって、医学だけでなく法律だとか工学だとかいろいろな分野の人たちが集まって水俣病のことを研究しました。そのときも宇井さんのアドバイスあるいは宇井さんの資料提供が裁判の勝利に非常につながっていたと思います。

そのあと、びっくりするようなことを宇井さんは提案するので。私なんか田舎にいますからぜんぜん発想しないようなことです。例えば 1972 年に患者さん連れてストックホルム行こうと。何しに行くのかと言ったら、国連環境会議があってそこで訴えようと言うのです。このとき濱元二徳さんや坂本しのぶさんたちと一緒に、私は初めて国際学会に患者さんと一緒に出たのです。こういう発想というのは宇井さんからしか出てこなかった。私も国際会議で話をするのは初めてで、「僕は英語が下手だから駄目だ、行かん」と話していたのです。でも、「ちゃんと通訳つくよ」と言われたので安心して行ったら、当日になって「大学出には通訳は付けません」と言われて、がっくりきて一夜漬けで大騒ぎした記憶があります。ときどきそうやってすかされることもあるのです。

他にも、今日ここにたくさんお見えになっているのですが、公害研究委員会で 1975 年に宮本先生を団長として世界公害調査団を組織して行ったのです。そのときも宇井さんと一緒にでした。国際的に調査に行こうなんて、田舎にいますと思いきもしないです。「おまえもついてこい」と言われてついていったのですが、それが一つのきっかけとなって、今日まで続いているカナダの水俣病事件だとか、アメリカで起こった有機水銀中毒事件を日本に紹介したりして、いろいろなインパクトになりました。非常にアイデアの人だったと思います。

アイデアだけではありません。私はその頃、未認定患者をたくさん抱えて、これを一体どうしたらいいだろうと一人で悩んでおりました。そのときに宇井さんにその話をしました。認定されていないたくさんの方がいるということをお話したときに、宇井さんは本当に涙を流しました。

この人はなんて優しい人だろうと僕は思いました。そのことがいまでも忘れられません。それから私は自信をもって、川本輝夫たちと患者の掘り起こしをやりました。そして、宇井さんの紹介で未認定患者、潜在患者のことを岩波の『科学』に書かせてもらったんです。これがきっかけになって岩波新書の『水俣病』を書くことになりました。これはいままも若い人が読んでくれています。これは私が書いたというよりも、宇井さんがあの涙で私たちに水俣病のことを知らせて広げてくれたと思っております。

いま私は、水俣学を提唱しております。これは、いままで 50 年の水俣の歴史の中から一つの教訓を学び、そして宇井さんの意志も引き継ぐ形で新しい学問のあり方を私なりに模索しているということです。今日はこういう機会を与えてくださった方に本当に感謝して、私の話は終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

井上 どうもありがとうございました。続きまして、早稲田大学教授の淡路剛久さんです。演題は「専門家として、人としての宇井先生から学ぶ」です。

淡路 私どもは歴史上の人物を見たときに、しばしばよくぞあの時代にああいう人が出てきたものだと、そういう感慨をもって、「時代が人を求める」という表現を使うことがあります。宇井さんは 1960 年代から 70 年代また 80 年代に至るまで、公害を告発し、公害を解決するために戦う闘士として、まさに時代が求めた人だったのではないかとこのように思うわけでありませう。

私が宇井さんに最初にお目にかかったのは、実は 1965 年のことでした。それから 40 年余り、ときに近いところで、いまは『環境と公害』むかしは『公害研究』という雑誌を出してその編集同人としてずっと一緒に協力しながらやって参りましたし、ときには遠いところで、宇井さんが沖縄におられたときにはたまにしかお目にかかれないうことでもございました。しかし、その間 40 数年ずっとお付き合いをいただきまして、公害・環境問題の研究者としてもまた人間としても、最も深いところで、本質的なところでご教授いただいていたというふうに思っております。

宇井さんと私は、実は年齢はかなり違うのです。10 歳違うのですが、しかしどういふことが奇縁でありまして、宇井さんが先ほど上映されたビデオの中で日本ゼオンの話をされておりましたが、そこから東大の大学院に戻られたのが 1960 年だったと思います。それは私が入学した年でございまして、それで 64 年に私は大学の助手になりまして、宇井さんが 65 年にちょうど工学部の助手になられました。しかし法律と工学ですから遠いところにあるわけですが、法律の方の世界で、先ほどお話が出ました加藤一郎先生が、文部省の科研費で研究会をつくりまして法学者が集まったことがあります。ここで数年研究活動を続けておりまして、そこに公衆衛生の専門家の方が加わり、宇井さんも助手をされておられましたので、そこにオブザーバーとして参加されました。そういう機会が 65 年にありまして、その時に初めてお目にかかって、それ以来ずっとお付き合いいただいていたわけですね。

ところが思い返すと、実はその 2 年と少しほど前だったと思うのですが、私が駒場から本郷に移ったときに、工学部の方で水俣の写真展があったのです。キャンパスを歩い

ていたら写真展がありまして、それが実は水俣病の状況を写したもので、非常に大きなショックを受けました。これは先ほど原田先生の話にありまして、宇井さんが現地に入ってさまざまな資料を集め写真を撮ってこられたり、あるいは写真家として活躍された方の写真を持ってこられてアピールをした、最初のことだったのではないかと思います。さきほど話に出ましたが、富田八郎、「とんだやろう」という名前で活躍されていたわけですね。私はそのときに、すでに宇井さんは被害者とともに、その被害の背後にある巨大な公害の原因というものを見据えておられたのだと思っております。

宇井さんというのは、大変直観の鋭い方だと思うのです。直ちに物事の本質を見抜くところがある、そういう方ではないかと思っております。公害という現象を、細分化された専門の部分部分で切って、そこからものを言うということについては大変批判されておりました。全体を見なければならぬ、全体の中で本質を見なければならぬということを書いておりました。やはり動物的本能とでもいうのでしょうか、全体の中で本質を見ることができた鋭い感覚の持ち主であったように思います。当時は部分部分の細分化された研究とさえないような研究者が、公害研究という名目で特殊利益に奉仕するようなことをやっていたので、宇井さんは大変怒りをもってそのことを告発しておられたと思います。

さきほど話がありましたけれども、宇井さんは造語能力があり、しばしば新しい言葉をつくられて本質をズバツと言われるところがありました。「公害の起承転結論」というのもそうだと思うのです。公害が発生しますと、対策のために直ちにいろいろな研究が始まって、比較的早い時期に真理に到達する。ところが、その後原因者であるとか中立的第三者と名乗るところから、いろいろな反論がたくさん出てきて、数においては何十倍という反論が出てきて、結局正論と反論が中和して真実がわからなくなさせられてしまう。これが「公害の起承転結論」である。そういうことを指摘されたわけですが、こうした現象がずっと繰り返し繰り返し現れてきた、これがこれまでの歴史ではないかと思っております。

宇井さんの本質を見抜くというその能力は、私のいる法律の世界にも向けられておりました。60 年代、70 年代にはたいへんたくさん公害にかかわる法律がつくられました。宇井さんの一流の表現で、「日本には、積み上げると枕にするには高すぎるほどのたくさん公害に関する法律がある。しかし一つ法律ができるごとに公害の解決は遠のいていく」といって、法律のことを批判されたりいたしました。

さきほど、宇井さんは時代が求めた人だったと申し上げましたが、もちろんそれはその人本人がその時代の求めに応えるという決断をしてそういう行動しなければ、時代の人にはなれないわけですね。私は、宇井さんが時代の求めに応じようと決断したのは、もしかしたら 1970 年のことではなかったかと思っております。当時、水俣病補償処理委員会から患者さんに大変不利な斡旋案が出され、それは昭和 34 年の見舞金契約の再現ではないかと危惧されました。そういう斡旋案が出るというときに、水俣の被害者、支援者の人たちと一緒に宇井さんは厚生省に座り込まれました。私も実は座り込んでいたのですけれども、斡旋案が出たとき

に宇井さんは厚生省の中へ抗議のために柵を乗り越えて入っていったわけです。それで逮捕されたということがありました。私はここに研究者としてだけではなくて、一人の人間として「これは行動せざるをえない」という宇井さんの決意を見たように思うわけであります。そのときから宇井さんは、時代に応じていく人になられたのではないかと考えております。それ以降宇井さんの活躍は目覚しく、専門の領域で、水の専門家としてたいへん活躍されるだけではなくて、反公害の運動のリーダーとして、日本のみならず国際的にも活躍をされました。

さきほど原田先生から、世界公害探検隊という調査団が派遣されたという紹介がございましたが、そのとき留学中の私も現地で参加しました。宇井さんにイタリアでお目にかかったときには、イタリアのいろいろな優れた研究者と交流があっただけではなくて、イタリアでは当時、裁判官が最先端で反公害の運動をやっている、私はそこでアメンドラという裁判官に紹介されたりしたことがあります。

人間というのは大変面白い存在で、宇井さんという強面で強いイメージがありますがけれども、宇井さんにもウィーク・ポイントがあったと思うのです。世界公害探検隊でローマでお目にかかったときのことで、一日いろいろ調査をして、夜ホテルの一室でみんなで飲んでいたわけです。突然宇井さんが弱々しい声で、「ちょっとわがまま言っちゃおうかな、上の部屋なんだけど、この部屋に変えてくれないかな」と言われるのです。宇井さん実は高所恐怖症でして、ところが上の部屋というのはだいたい上だったのでしょうけれど、酒を飲んでた部屋もたぶん4階か5階ぐらいでして、我々だったらそれもやっぱり高所ではないかと思うわけですが、高所恐怖症の方は相対的で、少し下がればまたそれで安心するようです。その宇井さんが、いま一番高いところの天国におられて、もうそろそろ半年以上経ちますから高所恐怖症にも慣れてきて、奥様や子供さんそして我々を優しい目で見られておられるのではないかと考えております。

この40数年、宇井さんからいろいろ学ばせていただきましたし、公害研究者としてどう生きるべきかということだけではなくて、人間としてのあり方ということに大変深い感銘を受けて宇井さんを見させていだいて参りました。以上を報告に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

井上 どうもありがとうございます。それでは続きまして沖縄大学学長 桜井国俊さん、お願いします。演題は「若い世代に伝える、宇井さんの言葉と仕事」です。よろしくをお願いします。

桜井 ただいまご紹介いただきました沖縄大学の桜井でございます。私はこの集まりが、宇井さんを直接知らない若い人たちに宇井さんの言葉あるいは仕事を伝えていこうと、そういう趣旨であると伺いまして、私なりに宇井さんの言葉と仕事を若い世代の人たちにつないでいきたいと思っております。

今日は、実は沖縄戦が終結してから62年の慰霊の日で、本日沖縄では熾烈な地上戦で亡くなられた二十数万の御霊を慰めて、不戦の誓いを新たにさまざまな集いが厳しい夏の日差しの下で行われているはずで、沖縄に暮らしておりますと、日本がすさまじい勢いで戦前に戻りつつあ

る、戦前化しつつあるということを目撃するわけですが、正直なところ今日は沖縄にいてさまざまな思いをめぐらすべきではないかと迷いながら、東京に参りました。

私は、宇井さんが1965年に東京大学の都市工学科の助手として水質実験を担当されたときに、最初に鍛えられた学生です。そういう意味で、水処理の同じ専門分野で働いてきました。そういう角度から見た宇井さんは、徹底的に現場での判断を重視する、それからそのこととつながりますが、誰かえらい人がこう言っているというようなことには媚びない、屈しないという現場主義と反権威主義を貫いてこられたように思います。私の専門の立場から、レジュメに三つほど事例を書いておきました。大学で勉強しておりますと、ほとんどの東大の先生方は横文字を縦にするとそれが学問だと、こう思っているところがあったわけです。しかし、歴史がヨーロッパとは違うわけですから、ヨーロッパでは家庭から出る汚水も工場廃水も、ともかく町の外に出すことが第一という形です。そういうことから歴史が始まったため、同じ排水路で町の外に出していたわけです。そのため、それを処理しなければならないということになったときに、すでに混ざっているものをどう処理するのかということが問題になったわけです。日本ではまったく何もされていないわけですから、混ぜるべきでないものは混ぜなければよい。にもかかわらず、日本のほとんどの大学の先生方は、ヨーロッパに倣っていかに混ぜたものを処理するのかということをやっていた。そんなものはあほらしい、そんなことはやる必要がないということを見事に議論の中で喝破された宇井さんを見て、私は目から鱗という感じがいたしました。

また、非常に有名な流域下水道論争という論争があります。流域下水道というのは大きな下水道をつくらうということですが、スケールメリットが働く、安くなるというのは正に神話です。下水処理場こそは大きくなると安くなりますが、パイプはどんどん深くなり太くなります。儲かるのはゼネコンだけです。そういうゼネコンに味方し、あるいは役所に味方し、多くの学者がその片棒を担ぐ中で、徹底的にこれを批判してこられたのが宇井先生であり、中西準子先生だったと思います。

いま世の中はどんどん戦前化し、集団的自衛権についての有識者懇談会なるものがつくられて、東大の先生方が正に御用学者として活躍されておられます。こういう事態をいまの若い人たちが、例えば東大で学んでいる若い人たちはどう見ているのか。いろいろな意見をもつことはよいわけですが、明らかに特定の意見しか持たない人たちを集めて首相が有識者の懇談会をもつ。こういうことにわれわれはあまりにも黙ってすぎるのではないのか。特に宇井先生が流域下水道の是非についてあれだけ激しく、強固なゼネコンと建設省の連合軍に対して戦いを挑んだということ、私は非常に貴重なものだと思います。

宇井さんはこうした形で論争を挑まれましたが、結局東大には容れられず、日本社会の矛盾がある意味集約する現場である沖縄に1986年に移られました。私は東大闘争のあと、東大を出て途上国で暮らしていました。宇井先生に鍛えられた私の分野が、一番役に立つのは実は途上国です。途上国の現場で私は、人は実践することで学ぶということを実感しました。そういう私が、もう一度東大に戻って

ることになりました。1992年に、東京大学でも途上国のあるいは世界の環境問題を学生たちに教えなければならないということで、東大に戻りました。しかし、実は非常にがっかりしました。「戻ってくるな。お前は東大を捨てたはずじゃないか」という形で、学生たちに追い出されるということを目指していただいたのですが、それでもありませんでした。また、私や宇井先生の専門分野である衛生工学がもっとも役立つ現場は途上国です。飲み水が安全ではないために、子供たちがばたばた死んでいくという途上国の状況があります。この状況に一番直接的に役に立つ学問をやっているはずの東大の大学院生たちが、現場である途上国にはほとんど行こうとしない。それほど日本は快適であるということですが、私が若い皆さんに問いたいのは、皆さんのやっている学問は現実社会とどう関わっているのかということです。人は実践の中でこそ学びます。そして激しい現場で格闘してこそ人は育つわけです。それぞれの学問、それぞれの現場があると思います。現場から離れたところでは人は成長しないということ、宇井先生は言っておられたのではないかと思います。

さきほど申しましたように、宇井先生は日本社会の矛盾が先鋭的に現れる現場中の現場としての沖縄に、1986年に移られたわけです。いま沖縄では何が起きているのか、皆さんご存知だと思います。多くの皆さんが、いまの日本の状況から、この戦後62年、平和憲法があるいは9条が日本を守ってきたといっておられますが、私はこれはほとんどない嘘だと思っています。この62年間、沖縄は一貫して戦争と隣り合わせでした。背中合わせでした。まず朝鮮戦争があり、ベトナム戦争があり、湾岸戦争があり、アフガン戦争、イラク戦争があり、常に戦争と背中合わせです。そういう沖縄、国土面積の0.6%を占めるにすぎない沖縄に、米軍基地の75%が居座り続けている。そしていま限りなく日米両軍が一体化して、アメリカのする戦争に世界のどこまでも付き従っていく。

そういう中で何が起きているのか。文科省がいわゆる集団自決には軍命があったという記述を教科書から削除しようとしております。アメリカに付き従って世界のどこまでも行くためには、沖縄の人々の間にある、軍隊は国民を守らないという沖縄の人たちが体験した記憶を拭き去る必要がどうしてもある。また、沖縄では新しい基地がつけられようとしています。辺野古につくられようとする新しい基地に反対している人たちに対して、自衛艦、掃海護艦のぶんごが出勤して威圧する。こういうことが日常的に起きています。あるいは私の大学ではありませんが、隣の大学に一昨年ヘリコプターが落ちました。ヘリコプターが落ちたのですが、一週間学長が大学の中に入れませんでした。そのあとすぐ私は、私の大学にヘリが落ちたら、私の許可なしには絶対に入れないということ、アメリカの大統領とその当時の小泉首相にあらかじめ宣言をせざるを得ませんでした。そういう状況の中で沖縄はあります。

そしていま、沖縄に本土が近づきつつある。本土の沖縄化が進んでいるのではないかと考えています。そういう意味で、私は沖縄というのは日本のいろいろな状況を考えるうえでの大きな現場だと思います。沖縄だけが現場だとは思いませんが、やはり現場で皆さんの学問と真剣に向き合っていたいただきたい。これが、宇井さんが残された言葉では

ないのかと思います。そういう宇井さんの思いを引き継ぎながら、いま私は沖縄で暮らして若者を育てています。沖縄では、基地を受け入れることに対するものすごく手厚い保護があります。これは麻薬です。この麻薬を復帰後35年、打たれ続けています。この麻薬から脱して、自らの二本の足で立って沖縄の未来をつくっていくということが、宇井先生が沖縄大学にいられて、後進を育てようとした仕事ではないのかと思っています。私は沖縄の地で、そういう仕事をぜひ引き継いでいきたい。若い皆さんにはぜひそれぞれの場所で現場と向き合っていたいただきたいと思います。どうもありがとうございました。

井上 どうもありがとうございました。続きまして和光大学名誉教授、最首悟さんお願いいたします。演題は「第三者はいない」です。よろしく申し上げます。

最首 いたたまれなさ。うしろめたさ。やましさ。その思いが少しずつ増していくという状況がありました。1960年の6月15日とか、1962年の大学から学生の自治を切り離すという大学管理法案の頃まではまだよかったです。そのときはこの安田講堂の上で茅さんを一晚缶詰にしたといっ、大学に来るなど言われました。けれども、65年くらいになると少し本格的になってくる。日韓会談、韓日条約。そこで日韓人民連帯ということをやろうののですが、いったいそんなことが可能なのか。

そしてすでに61年からベトナムで枯葉作戦が始まっているのです。四国全土を枯れつくすだけの枯葉剤が撒かれたのです。ベトナムの死者は300万人で、負傷者は400万人。米兵の死者は5万8千人。それが65年ごろピークに達していきます。そのときベ兵連ができて、私たちはベ反戦を大学の理工系を中心にしてつくったのです。山本義隆たちとつくった。もうその辺はやましさがだいぶ染み通ってきている。これが東大闘争の相当大きなバックグラウンドです。太平洋戦争の責任と、朝鮮戦争からベトナム戦争へ、そして沖縄を犠牲にして日本は繁栄をうたう。

そして70年を過ぎますと、にっちもさっちもいなくなってきます。これは70年代半ばに書いたものですが、「もはや未来に向かって流れようのない時間を、もたされた人たちがいる。いくらお金を積まれても、未来は買えるわけではないでしょうという水俣病に罹らされた人たちがいる。私たちが持ったのは堂々巡りの時間、右往左往の時間というべきもの。私の入り込んだ世界は、例えばその当時深くしみこんだ二人の言葉で言い表すと、一つは高橋和巳の言う抑圧体系の下にある世界。一つは宇井純の言う原理が貫徹する世界である。高橋和巳については省略しますが、大学と企業と資本の三本柱が抑圧体系を構成するのだ。大学にいるものとしてはどうにもまめがられない突きつけでした。

宇井純の世界とは、彼の公害への住民運動の第二原理を指す。ニュアンスを少し強めて言うと、公害には第三者はいない。いるのは加害者と被害者である。第三者を名乗る者は必ず加害者である。そして公害を差別と読みかえると、より根底的な原理になる。差別には第三者はいない。いるのは差別者と被差別者である。第三者を名乗るのは必ず差別者である。

私たちが突きつけられてすぐに言うのは、「私がいったい何をしたというんです。私はむしろあなたがたを同情し

て、自分でもそういう気持ちはいくらだってもっているわけです。

この宇井純の言葉というのはどうしようもないです。私たちは加害的なものとして自己否定的に振舞う。少なくともまず自分の属する組織の内部告発、そしてそれはすぐに自分の内部の告発になりましょう。加害者、共犯者、差別者、そして自己否定というのはどう身を処すものであるか、というような中に投げ込まれた。加害的被害者、被害的加害者。これはついに宇井純が直接指した公害の拡張型としての放射能、電波、地球温暖化、そしてそもそもは多重化学物質相乗汚染症という、科学の現状はどのようにしても取り組めない生き物の不調があります。おそらくこの加害的被害者、被害的加害者というのは、一国を越えて、南北を越えて、地球的なものになっていく。アーティストと簡単に言いますが、大変な状況です。

その意識、宇井純の言う第三者はいないという意識がほとんど罪意識のようにすべての人にいきわたる。それはいつだろうか。普通に暮らして、しかもあっちこちいろいろと体の不調、心の不調を感じる。そこに罪意識がダブるだろうか。アダムとイブが知恵の実を食べて以来の罪意識の変容というのがここにある。そして私たちはすべて、そこから脱却しなければ未来はないだろうという時代に生きております。

しかし、そんなに簡単にものは言えない。最終的なメッセージは石牟礼道子からすでに発せられている。「祈るべき天と思えど、天の病む」。

四大宗教を超えた普遍的な宗教というのを一方で目指しながらも、この石牟礼道子の言葉の前に私たちはどうしたらよいのだろうか。やはり人を、そして生き物を日々の暮らしの中でいつくしむ。そこからしか何か始まらないのではないか。とは思うのですけれども、いつくしむとは何か、ということでもまた堂々巡りがはじまる。そしてこの堂々巡りを避けてはならないというふうに思います。どうもありがとうございました。

井上 どうもありがとうございました。続きまして、九州大学教授 吉岡齊さんです。演題は「宇井さんの言葉と仕事は、何だったのか」。よろしくお願いたします。

吉岡 一応レジュメがこのパンフレットにありますけれども、同じことをしゃべってもしょうがないと思うので、基本的に別の話をしたいと思います。私はなぜここに呼ばれたのか、いまだに分からない部分もあるのですけれども、自主講座運動との関わりというのはほとんどない。70年代の半ばに、私東大の学生でしたけれども、一度だけ宇井さんの顔を見に行きました。御用学者の役割とかいうずいぶん迫力のある話で感銘を受けて、内容は御用学者というのはこんなふうにするものだという常識の範囲内ではありましたが、非常に迫力に圧倒されて帰ってきた。もう一回、実は自主講座に出た記憶がありまして、こちらもお客ですけれども、1979年に「高木仁三郎来る」というでかい看板がはってあって、ついそれに引きずられて、院生の頃でしたけれども見に行きました。高木さんは怖い人で寄らば切るといふ迫力を、当時四十くらいだったと思いますが、持っていました。その二回しかないわけです。それと、宇井さんとはだいたい一、二年に一回くらいずつしか会っておりません、特別に親しい関係でもないということで、

ここに呼ばれたのは資格があるのかという自問自答もあるわけです。けれども逃げる理由もありませんので、いま壇上に立っているわけです。ちなみに自主講座に聴きに行った私の気持ちというのは、物理学科のころ上野にパンダが来まして、授業の時間の合間にパンダを見に行ったら、そういう経験があるのですが、それと似たような軽い気持ちでありました。

宇井さんはアジテーションをやるのは絶対苦手な人だと思います。とつとつとゆっくり話される。この会が始まる前にビデオが流れていましたが、まさに宇井さんだな、宇井さんらしいという話し方でした。私も会話はへたくそで、正直いってコミュニケーション障害が自分でもあるのではないかと考えているわけですが、宇井さんもそうだと直観的に思うところがあります。『公害原論』をつくるときも、講演録ですので自分で直さないといけないわけで、気が重かったと思うのです。「てにをは」がでたらめな部分とか語尾がないとか、いろいろあるので頭が痛かったと思います。ところが、有能な編集者がいてほとんど直すまでもなくてきていたのにはびっくり仰天したということが、今日のパンフレットの回想文に書いてあります。そんな人だったな、話下手だったなということが印象に残っております。

だからこそというわけではありませんが、今日のパンフレットで紹介されているいくつかの言葉は「公害に第三者はいない」などですが、皮肉をこめた言い方をすれば、ワンフレーズという福田赳夫や小泉純一郎とかが得意としたやり方と呼べるわけです。けれども、だからこそ鋭いワンフレーズ、含蓄の深いワンフレーズがたくさん残ったのだと思います。これは裏返しみたいなもので、だから口下手が悪いわけではないということの証明でもあるわけです。こういうことを深い含蓄がある言葉として噛みしめて、皆さんにも噛みしめて欲しいし、私も日々噛みしめているところです。

私がここに呼ばれた理由を強いてあげれば、宇井さんがやってこられたような対抗的な、つまり政府や産業界に対して対抗的な調査、研究を進めてきたということです。私の場合はエネルギー、原子力政策が中心として調査、研究をやってきました。活動の分野は、宇井さんは水問題ですので分野は違いますが、やっていることの共通性が非常に多いのではないかと考えております。

もう一つのポイントとしては、「市民の科学」ということを宇井さんは古くから提唱しておりました。私はプロの研究者ですから市民ではないわけですが、市民科学をサポートするという活動に何年も携わっておりますので、そういう点でも共通点が多い。だからこの二つの理由で呼ばれたのでしょうから、この二つの話を もう五分経ちましたけれども 後半部分でしてみたいと思います。

宇井さんの活動として非常に印象に残るのは、1972年 私は東大に入学した年なので何も貢献していないのですが スtockホルムの国際環境会議に患者も連れて行って大活躍されたということです。それを前にして Polluted Japan という英文報告書を出して、日本の公害のひどさを世界に広く伝えようとした。それに環境省、当時環境庁も慌てて、政策を動かすような大きな影響を与えた。少なくとも政策を一定程度変えるのに貢献したのだと思います。

私の場合もそれを思いながらいくつかの活動を行ってき

ました。最近の例で言えば、私 実には多くの方がご存知
と思いますが 御用学者でありまして、1997年から内閣
府原子力委員会の専門委員をやっています。2005年に最新
の原子力政策大綱がまとめられるとき、私たちは圧倒的少数
派で、32名中反対が2で、賛成が30という構成でした。
2名の反対者として何ができるかということが問われまし
た。

まず、核燃料サイクルで再処理の路線をどうするかとい
う議論が、新計画策定会議の前半部分に行われました。半
年くらいかけて2004年の末くらいに中間とりまとめが行
われ、そこで再処理政策推進を継続するという結論が出た
のです。それに対してどうするかということで国際的な研究
チームを組織しまして、対抗レポートを作り、審議が終
わる会議の終盤に持ち込んで、再検討せよと言ったのです。
しかし、結局数名の委員がその必要はないということで押し
切られて、いまの政策大綱ができてしまったわけです。
このように国際的な支援を頼んで活動をを進めるのは割と大
変です。中間とりまとめをまず英訳して外国人に見せて、
それを批評してもらって、さらにこれを日本語に訳して出
すとか、そういうことをやらなければならないので大変だ
ったのです。

けれども、そういう活動を30年余りに宇井さんがや
られたということに勇気付けられて活動をやりました。そ
れを援助してくれたのが、高木仁三郎市民科学基金でした。
私たちは通算6名の外国人を招きましたが、渡航費、滞在
費、通訳・翻訳費など全部で250万円くらいで賄いました。
原子力委員会がこれをやったら1億円くらいかかることを、
少ないお金でいかに最善のものを作るかということで、宇
井さんの経験に非常に勇気付けられました。

宣伝ではありませんが、高木仁三郎市民科学基金は結成
されてもう7年目になります。今日も幹部の方たちがお見
えですが、私は6年選考委員長をやしまして、ようやく顧
問に隠居させられました。非常に面白い組織で、市民から
協力を募ってお金を募って、年間1千万円くらいは市民の
研究に出すのです。産業界や政府に対する対抗的研究にお
金を出して、世の中を騒がしていくという仕組みを構築し
ているところです。財政状況も黒字に転ずる状況です。そ
ういう市民研究は、大学の職業研究者は排除し どうし
ようもない場合には選びますが、職業研究者以外の人
にお金を出すという原則でやってきたわけです。惜しむら
くは、選考委員長をはじめ選考委員のほとんどすべてが職
業研究者であるということで、これを克服すべく今年から
市民の選考委員を入れて、将来的には大半を、過半数を市
民の選考委員にしていくという方向に 私は理事ではない
ので責任をもっては言えませんが、もっていきたい
と思っております。どうもありがとうございました。

井上 どうもありがとうございました。講演の最後にな
ります、北海道大学准教授およびさっぽろ自由学校「遊」
の宮内泰介さんです。演題は、「フィールドワーク・歴史・
適正技術」です。よろしくお願います。

宮内 どうもこんにちは。宮内と申します。北海道大学
で環境社会学という分野を教えております。南太平洋のソ
ロモン諸島の調査研究や、沖縄・北海道などいろいろなと
ころでいわゆるフィールドワークを中心にした調査研究を
しております。同時に札幌のさっぽろ自由学校「遊」とい

うNPOを根拠にしているいろいろな活動をしております。

私は、学生ないし大学院生くらいの頃 1980年代特に
半ばくらいから後半にかけてですが、反公害輸出通報
センター 改称しまして反核パシフィックセンター東京
という名前になったのですが の活動に参加していまし
た。これは、ご存知の方も多いかもかもしれませんが、宇井
さんが始めた自主講座から派生したグループの一つでした。
その活動に私の20代後半のかんりの部分を費やしたので
す。それが青春の過ごし方としてよかったかどうかはわか
らないのですが、後悔はしておりません。ただ、宇井さん
自身は、私が関わった頃、その活動には直接の関与がほと
んどありませんでしたので、私自身は宇井さんと直接関わ
るということはありませんでした。

ただ、やはり私もこの大学で学んだ者なのですが、宇
井さんが駒場の自主講座をちょうど私が大学入学した頃
にもやっておりまして、その頃からずっと宇井さんの話を聞
いておりましたので、直接間接にかなり影響を受けている
と思います。けれども、僕にとって宇井さんは、よくわか
らない存在だったのです。何かものすごいことをいう人な
のだけれども、全体像がよくわからないし、何を考えてら
っしゃるのかがもうひとつわからない。わからないけれど
もしかし、同時にとてつもなくすごい存在という印象をず
っと持っていました。

それで今回、この会に呼んでいただいたこともありまし
て、この何ヶ月か宇井さんが60年代以降に書かれたもの
を改めて読み返すという作業をやりました。そこで改めて、
宇井さんがすでに60年代70年代にすごいことを書いてい
るということを見つめました。そのあたりのことについ
て2、3お話ししたいと思います。

一つ目はフィールドワークということですが、宇井さんは、
ご存知のように、終生自分は技術者であるということをお
認みの方でした。しかし同時に宇井さんは、水俣との関わり
、公害問題との関わりの中で、近代日本の技術というも
のが、もうすでに技術そのものに政治性をもっているとい
うことを発見して、それを主張されていた。そうすると逃
げ道がなくなってしまふわけです。そこで、突破口という
意識は宇井さんには当時あったわけではないと思うので
すが、水俣でのフィールドワーク 宇井さんは当時フィー
ルドワークという言葉を使っていなかったと思いましたが

を始めた。そのことの意味合いを、それから宇井さんが
水俣で行ったフィールドワークの中身は 私にとっては
謎に包まれているわけで 実際にどうだったのか、そし
て宇井さんにとっての意味は何だったのかということをお
もう一回私たちは踏まえなおす必要があると思っております。
2005年に、かなり最近ですけれども、宇井さんはこん
なことを書いておられます。「私が水俣病に直面したとき役
に立った方法は、むしろジャーナリストが行う聞き込みで
あり、聞いたことを確かめる足であった。環境問題のよう
な新しい分野における方法論はそうしたものであると聞い
たのはかなり後のことになる。宇井さんにとってのフィー
ルドワークの意味、それからそのことの私たちにとっての
意味を、もう一回考える必要があると思っております。

次に二点目です。宇井さんがフィールドワーク重視とい
う姿勢をとりはじめてしばらくしてからだと思っておりますが、
もう一つの方向性を宇井さんが見出したのではないかと私

は思っています。それは何かというと、歴史を見るということ、歴史を重視するということだと思います。宇井さんが60年代70年代かけて公害問題に関わる中で、常に参照した歴史的経験というものがありません。それは主に三つほどあって、一つは明治以降の足尾です。あと二つは、あまり知られていないのですが、茨城県の日立鉱山の煙害問題、それから栃木県の荒田川の水質汚染の問題という二つの大正期の公害問題です。それに足尾を加えた三つを宇井さんは常にいろいろところで言及し、そこからいろいろと学んだようです。おそらく宇井さんにとって歴史を重視するということが、公害の苦い経験というものが歴史を軽視したことから生まれているというある種の直観があったのではないかと思っています。つまり、解決のために歴史を無視してはいけないということだろうと思います。私たちがやっている環境社会学会という学会がありまして、その学会誌を1995年に創刊したときに、その創刊誌に宇井さんに寄稿していただきました。そのときの宇井さんの文書の中に、かなり強い調子でこう書いておりました。「ここで研究に対する出発点の合意として求めておきたいのは、研究対象の歴史性を重視することである。」自然科学出身の宇井さんが、社会科学の私たちに「歴史を重視しなさい」といって説教するのは何となく滑稽ですが、これはすごく本気に書いているなどという感じを私は受けました。そのことの意味合いを、もう一回私たちは考える必要がある、吟味する必要があるのではないかと考えております。これが二点目です。

そして三点目です。こうして、フィールドワークという、技術者としての宇井さんとしてはおそらくある種の迂回路だったと思うのですが、そしてもう一つの迂回路である歴史重視という、この二つを潜り抜けることで、宇井さんはもう一回技術というものに立ち戻るといってプロセスがあったのではないかと理解しています。それは何かというと、宇井さんの言葉で言えば、住民運動がつくる科学、あるいは適正技術という主張ではなかったかと思えます。これにはさきほどの、足尾、荒田川、日立鉱山という三つの歴史的経験が、単に公害問題としての経験ではなくて、それをその地域の住民たちがどう克服しようとしたかというときに、科学を彼ら自身が作り出していったというプロセスを、宇井さんはかなり学んだのだと思うのです。その影響がかなり強かったとご本人も何度も書いています。また1964年の沼津・三島コンビナート反対運動の中で、高校の先生だとかその住民たちが、ものすごい学習運動あるいは調査活動をしたのを宇井さんは割と近くで見て、その影響もかなり強かったとご本人も何箇所かで書いています。

そういう中で、宇井さんは住民がつくり出す科学という主張をしはじめた。これには二つの側面があったと私は理解しています。一つは、住民運動には科学が必要だという側面。もう一つの側面は、こちらのほうが大事ではないかと思うのですが、住民運動から出てくるものこそが科学なのだという側面です。1973年の段階で、宇井さんはこんな文章を書いています。「この荒田川における、これは先ほどの荒田川です、科学技術の使われ方は、今日の科学技術のあり方、あるいは専門家の立場について重大な示唆を与えてくれる。科学技術の役割は、被害者が納得する水準の公害防除をいかにして実現するかが目的であり、その

主導権つまり科学の主導権は被害者になければならない。住民運動がつくり出した科学的調査の内容も、実はしばしばそこに科学の根源的な課題が現れている。」1980年に日本物理学会がシンポジウムをしたときに宇井さんをお呼びしていますが、そのときの宇井さんの言葉にもこんな言葉があります。「われわれが公害として問題を感知するのは、まずたいてい被害からです。発生源が何であるかということもたいていの場合に直観で容易にわかります。公害問題を見る限り、拡散の微分方程式などを使って住民を煙に巻く科学と、漁民や現地住民被害者の実感をとりいれていく科学と、どうも二通りの科学があるように思えてなりません。」こんなことを書いておられます。大事なことは、宇井さんがこの科学や適正技術を、単に技術の問題として議論するのではなく、社会の仕組みとして議論したということだと思います。だからこそ、住民運動、今風に言うと住民自治の中から科学がつくられるべきだという主張になってくると思います。宇井さん自身はおそらく70年代80年代以降、ご自分のご専門である水処理技術の中でこの実践を模索したのだと私は理解しています。1981年の段階で、宇井さんはこう書いています。「今になってみると適正技術の問題も、公害原論自主講座も、水銀の汚染のケーススタディも、みんな一つに収斂してきた感じがある。」一つに収斂という言葉、私たちはもう一回吟味する必要があると思っております。

今日私たちが、たとえば環境保全の現場だとか、あるいはまちづくりの現場だとか、いろいろな市民活動の現場で、市民自身、住民自身による調査研究というものを重視し、あるいはそれをエンカレッジする。あるいはそういうものをさきほど吉岡さんが紹介された高木基金もその一つだと思うのですが、生み出す仕組みづくりをいろいろな形で模索しているところです。そういうときに、宇井さんが辿ってきた足跡、あるいは宇井さんが模索してきたことが、本当にストレートに参照軸になっていると思っております。現場重視の学問、住民主体の学問という、下手をするとちょっとレトリックに終わってしまうことを、もう少し本気で、宇井さん自身はかなり本気で考えていたと思えますし、それを私たちが大きな参照軸として見ながら、どうやって自分たち自身の学問、研究というものを作り直していけるかということ、これからも考えていきたいと思っております。

以上ですが、最後に一つだけ。ここにたぶん出版関係の方もいらっしゃるのではないかと思うのですが、宇井さんは本当に面白いものを書き残しているのです。膨大に残しています。全集が無理でも著作集、著作集が無理だったら選集でも、ぜひつくっていただけたらと、最後にお願いですけれども、思っております。以上です。ありがとうございます。

井上 どうもありがとうございました。これで6名の方々の講演会を終わりにいたします。10分という短い時間にもかかわらず、わかりやすかつ心のこもったお話をしてくださいましてありがとうございました。今一度、講演者の皆様におおきな拍手をお願いします。

(休憩)

小林 それではご着席下さい。では、今回の「宇井純を学ぶ、後半部分のディスカッション、「若い世代が受取る宇井さんの言葉と仕事」、まずその第一部としてパネルディスカッションを行います。

私、司会を務めます実行委員長の小林です。それからこちらは副実行委員長の井上です。では、パネリストを先にご紹介致します。こちらに近い方から、京都精華大学大学院生の三輪大輔さんです。京都大学大学院生の友澤悠季さんです。一橋大学講師の山下英俊さんです。一番最後が東京大学教授の鬼頭秀一さんです。

最初にそれぞれの方から、大体5分程度、自己紹介も兼ねてお話をして頂いて、それからしばらくパネルディスカッションをしたいと思います。その後、フロアの方からもご意見をいただきたいと思っております。

それでは、最初に三輪さん、お願いします。

三輪 こんにちは。三輪といいます。本当にここに座っているのかと思いつつながら、お話を頂いた時に悩んだのですが、これもきっと宇井先生の天国からの愛の鞭だと思ってお受けしました。ですが、宇井先生は愛がなくても鞭は打つ人だったと、あとあと気がついたので（笑）。

私が宇井先生と出会ったのは、17歳の時に、高校の講演会で宇井先生にお話を頂いたときでした。「今、沖縄大学にいて、沖縄にはマッチ箱3つの建物しかない、便所の横にマッチ箱が3つあるような大学があって、学費が安くて…」などと、色々セールスをしていただきました。ああ、それはいい大学があるなと思いつつ、沖縄の大学に行くことにしました。宇井先生に学びたいと思ったわけです。加えて、高校生の頃、私は石垣島の白保に行っており、白保こともずっと気になっていたものから、沖縄に行くことを決めました。

実際に大学に入りまして、宇井先生のゼミに入ったわけです。ところが、入った瞬間から怒鳴られっぱなしで（笑）。本当に怒られたことだけは鮮明に覚えているのですが、他のことは記憶がとぼぼと、よく怒られていたような気がします。ゼミに入りまして、先生に、「僕は本当に環境を勉強したいと思っておりますが、先生、本は何を読んだらいいでしょうか。」と質問をしに行きました。すると、「お前は、イリイチも読んでいない。パウロ・フレイレも読んでいない。大学に来るまでにこれぐらい読んでおけ。」と、また怒られるような感じで、何をやっても怒られるような学生生活でした。

大学に行く傍ら、石垣島の白保がずっと気になっていましたので、その運動にかかわりながら学生生活を送っていました。その頃、やはり若いなりに色々葛藤がありました。宇井先生のスタンスは、あまりにも真っ直ぐなストレートな厳しいもので、本当にそれにちゃんと着いていこうと思うには、よほどの覚悟がいるというか、度胸がいるわけです。僕にそれがいいのかないのか分からないまま、3年くらい昼も夜も先生のゼミに通ってはいたのですが、それでもやはり僕の中では未解決のもやもやがずっと残っている状態でした。そして、大学の後半は、さすがに少し大学から離れてしまいました。宇井先生にちゃんと向き合えるような言葉を自分で持てるぐらいになってから、宇井先生に向き合いたいという気持ちもあったのだと思うのですが。

その後、ぶらぶらと海外などを旅しまして、実は、28、

29の時に、再び沖縄大学に今度は職員としてふとしたきっかけで戻ることになりました。またそこで、今度は事務職員の自分という形で、宇井先生と向き合う形になりました。ここでもまた怒られたり、ご指導を頂いたりしたわけです。沖縄大学では、大学でISOを取ることに関する仕事、環境の仕事をしていただきました。その一方で、山下さんがずっとやってらっしゃるような、学生の運動のサポートを一生懸命やってきました。その中で、考えさせる、気づいていくことが一杯ありました。それについてはまた後で話します。

今日、お話しさせていただくことをお引き受けして、宇井先生が亡くなってから、本当に何を僕は学んだのだろうかということ、随分悩みました。ここにお集まりの皆さんは、宇井先生がやってきたことという、やはり『公害原論 自主講座』の宇井先生をイメージされると思います。その後、宇井先生は86年から沖縄に行きます。沖縄で宇井先生がやってこられたことは、僕はある程度は知っているつもりです。例えば白保の問題、赤土の問題、黒い水の問題。もう本当に、白、黒、赤の問題をやってこられたわけです。その中でも分からないことも幾つもあります。まず、宇井先生がなぜそもそも沖縄という地を選ばれたのか。白保などいろいろな問題とかかわりながら、次の時代の展望をどこに見ていたのだろうか、ということ。

さらに、東大の自主講座をはじめ、先生が残してこられたさまざまな業績の一方で、宇井先生がやろうとしてやらなかったことは何だろうかということも、同時に考えなければいけないのではないかと思います。それは何だろうと考えた時に、最初に浮かんだのは水俣で聞いた話でした。水俣が90年代から「もやい直し」をやっていく中で、吉本哲郎さんが「学者がいっぱいこっちは調査に来た。いっぱい調査をしていったけれども、水俣には何も残っていかなかった。」というようなことをおっしゃいました。僕はこの言葉がずっとひっかかっています。宇井先生はたぶんちゃんとやろうとされていたのだと思います。でも、この言葉は重く受け止めなければいけないという気がしています。それを今にはね返してみると、宇井先生が沖縄でやった仕事が、ちゃんと沖縄に残っているのだろうかということが、問われなければならないと思います。こういう所に、次の僕の仕事が見えてくるのではないかと思います。

そういうわけで、沖縄で働いていましたけれども、昨年の4月からもう一回勉強しようと思って、今は大学院生になっています。

友澤 京都大学大学院生の友澤と申します。はじめまして。どうぞよろしくお願ひ致します。

私も、今そこでずっと座っている間中、本当になぜ私がこんな所でしゃべり得るのだろうかということ、をずっと考えておりました。

私は何者なのかと申しますと、私自身は宇井先生には去年、病院で一度しかお会いしたことはなかったのですが、色々な巡り合わせと色々な方のご紹介があって、本当に偶然、埼玉大学に資料を見に行っていたこともありまして、著作目録、年譜をぼちぼちまとめていこうとしていたところで、宇井さんが亡くなられたという状況でした。今日の冊子にも部分的には載せて頂いたのですが、**宇井さんは本当に膨大な著作を残されています。特に、住民運動や**

市民運動に関わる、小さなミニコミだとかピラだとか、あるいは本の前書きだとか、そういったところにも、本当に宇井先生の痕跡が沢山残っている。そういうものを全ては把握できないということがよく分かりました。今後、これらを、ぼちぼちと集めていく作業を続けていこうと思っております。よろしければ、これに関する情報をいただけたらと思ひまして、今日お配りしたチラシを作りました。よろしければご連絡をいただけたら大変うれいと思っております。今日から、情報収集を始めさせていただきますと思ひまして、このチラシを作りました。

前置きが長くなりましたが、私が今、宇井さんという方と出会う何を考えているか。今日、講演を聴きながらまた同じことをずっと考えていました。冊子の中で書きましたのは、現場とは何だろうかということでした。亡くなってから本当に多くのメディアが宇井さんのことを取り上げて、「現場をずっと歩かれた方だ」、「現場の方」ということを書いていました。ですが、紙面の上ではすごく短い文字数しか残されないで、では宇井さんにとって現場とは何だったのだろうか、あるいは、私自身にとっての現場は何だろうかということ、そこから考えざるを得ませんでした。そこで、今日はそのことを話そうと思ひました。

これは個人的な経験なのですが、昨年4月29日だったと思うのですが、水俣病「公式発見」50周年ということで、東京の日比谷公会堂で水俣フォーラムの企画で、昔、座り込みがあった場所やチッソの本社があったビルを歩くという 叢想行列という名前だったと思うのですが企画に参加させていただきました。その時に猛烈に感じたことは、歴史の欠如でした。

私、1980年生まれなのです。1980年生まれというのは、テレビも家にあって、毎日、ニュースなどを見ているわけですが、とにかく地球環境問題がどんどん盛り上がっていく時期だったのではないかと思います。酸性雨で被害を受けた森林だとか、砂漠化していく衛星画像とか、オゾンに穴が空いたオゾンホールとか、チェルノブイリも1986年にありました。1989年には湾岸戦争があって、そういうものをずっと見て育ったのです。

けれども、その私の中にどういう歴史観が養われたかという、「何もない」と思ったのです。その日は東京を歩きました。でも、見えたのは普通のビルだし、普通のコンクリートの道で、そこで「こういうことがありました」と教えていただかないかぎり、その場所を私はいつでも通り過ぎていくし、今もそうだったのです。その意味でむしろ、知らぬ顔をして、ずっと停止していつでも一緒のような顔をしている場所こそ、現場を考えないといけいではないかと思ひました。

その日の歩いた後のフォーラムの講演の時に、鹿児島県の出水からいらした中原八重子さんという方が、「東京で講演ができるという話をもらって、私は、本当にこぶしを握った」と言っておられました。「出水で言ったら、何にも届かない」ということを本当に強く言われて、「ああ、このことなのだ」と思ひました。つまり、出水で言っている、あるいはたぶん今も辺野古でずっと座り込みをしている人たちがいても、やはりここで日常過ごしていると、すぐそのことがどこかへ行ってしまうということなのです。そこからどうやって考えていけばいいか。

問題がすごく深いと思うのは、そのように日常を過ごしている 例えば大学から巣立っていく 人たちが、例えば、行政の中に入る、企業の中に入って行く。そして、東京本社で、例えば、すごく遠くの熊本支社のことを決める。その人たちは、自分の決断によって何が起るか、全部はもちろん把握できないわけです。にもかかわらず、決める。そのことが一方で、すごく苦しいことを生み出してしまふ。そういう構造が深い。それが問題で、そこから目を逸らしてはならないとその時に思ひました。

今日、安田講堂という場所ですべてということの意味も考えました。この東大から巣立っていく学生さんも といつても、今日は、私よりももっと上の世代の方も多くいらっしやいて、こんなことを言うのも恥ずかしいのですが、やはり日常の場から、例えば、大学院のゼミとか、大学のゼミのようなところから、考えていかなければいけないのだということ、常々思ひ返しています。

山下 一橋大学で講師をしており、山下英俊と申します。若手が3人おりまして、3人の中の私の位置づけを考えてみたのですが、三輪さんは、宇井先生に直接指導を受けた、かなり珍しい方です。そういう方からみると、やはり近づく宇井先生はかなり厳しい方なのではないかと思ひます。一方、友澤さんは、研究者の研究対象として、直接宇井先生と向かい合っている方なのではないかと思ひます。ある程度、客観的な距離をおいたところから宇井先生をじっくり見ていらっしやるのではないかと思ひます。では、私はどこにいるかという、三輪さんのように怪我をするほどには近づかず、やや離れたところから憧れの対象としてずっと宇井先生を見て、追いかけてきた、というような立場ではないかと思ひます。

私自身は、水俣病の最初の裁判の判決が出た直後、オイル・ショックの年に生まれて、チェルノブイリの年に中学生になりまして、地球サミットの年に大学に入学しました。そのため、育っていく過程で自然に環境問題への関心がついてきて、大学に入った頃には環境問題について何か仕事をしたと思ひました。ただ、とても漠然としていて、どうしたらいいのかわからない。というアプローチで環境問題に取り組むかということに悩んでいました。その中で、大学2年生の春に、宇井先生の講演をお聞きするという形で、初めてお会いしました。

講演の中では、宇井先生が東大の自主講座時代の活動をお話しされたところが、今でも印象に残っています。その自主講座の経験から私が受取ったのは、大学という場所の持っている意味だったと思ひます。一つには、宇井先生のお話でいえば、「大学の助手なり教員になつてしまえば、最低限の身分保障はあって、そこに最低限の自由がある。企業に入つてしまつてしまつたら色々しがらみがあるけれども、ある程度の自由があるから、我々は自分が立つべき立場に立つて研究ができるのだ」という研究の場として意味があります。

もう一つ、当時のお話で印象に残っているのが、自主講座の事務局があった部屋の電話が、当時、東大の中で一番電話代がかかっていたというお話でした。その意味で、大学という場が実際に運動の拠点にもなりうるのだということをお話していただいたと思ひます。

このように、当時の私は、非常に漠然と環境問題に何か取り組みたいと思っていただけでした。それが、宇井先生と出会うことによって、取り組みの現場として 友澤さんの話ともつながると思うのですが、日々勉強したり遊んだりしている大学という場が、自分の最初の現場になるのではないかと感じるようになりました。

ちょうどそういうタイミングで、私の友人から声がかかりました。その頃は環境が一つのブームだったので、環境問題に関するゼミや講義が幾つかありました。そこでいつも顔を合わせていた友人の一人が、A SEED JAPAN という青年環境 NGO に参加していました。当時、A SEED JAPAN では、アメリカの大学で始まった「キャンパス・エコロジー」という、大学で環境問題に取り組む運動を、日本の大学にも広めようという活動を行っていたようです。彼は、キャンパス・エコロジー活動を東大で行う受け皿として、サークルを作ろうという話を持ってきました。私もそれに乗って、2年生の秋に「環境三四郎」というサークルを立ち上げました。

私たちの頃よりは、今の後輩たちの方がさまざまな活動していますので、是非、三四郎のホームページを見ていただけたらと思います。私たちが始めた活動としては、「テーマ講義」という、環境問題をテーマにしたオムニバスの講義を作るという活動がありました。というのは、当時、東大にあった環境問題の講義は、それぞれの専門分野ごとに、工学部の先生は工学部の先生の話をするし、農学部の先生は農学部の先生がその分野で話をする。逆に社会科学系、政策的な話ができる先生は、あまり学内にいない、というような状況でした。そこで、自分たちで話を聞きたい先生たちを1人1回ずつ集めてきて、環境問題の講義を作ろうという活動をしました。

この活動が10年余り続き、後に、私が大学院に進学してからですが、後輩たちが宇井先生をテーマ講義にお呼びし、宇井先生にも出講していただくことができました。その時に、宇井先生が後輩たちに託したのが、「講義を作るというのが第一歩だとしたら、次は、自分たちで教科書を作りなさい。10年ぐらいかけて、少しずつ情報を集めながら改訂を重ねていくと、よいものができるだろう」というメッセージでした。もちろん、すぐに応えることはできなかったのですが、しばらく後の後輩が、テーマ講義をもとにして教科書を作りました。それが、今日も手元に持ってきましたが、『エコブームを問う 東大生と学ぶ環境学』(学芸出版)という本です。これも宇井先生との、直接的ではないのですが、共同作業の一つの成果ではないかと考えております。

この教科書を作った後輩たちは、教科書のもとになったテーマ講義に私を講師として呼んでくれました。そこで私は こんなことをテーマにしてよいのかという声もありますが、「東大に環境学は可能か」というテーマで話をしました。どういうことかと申しますと、おそらく自主講座の世代の皆さんは、ある程度お分かりになるのではないかと思います。宇井先生をはじめ、飯島伸子先生、あるいは西村肇先生のように、70年代に東大で環境問題に取り組もうとして、ある先生はそのまま助手に留め置かれ、ある先生は学内ではポストが得られなくなり、ある先生は教授になりたかったら公害の研究は止めろと言われてたわけで

す。このように、東大で環境・公害に関する研究がタブーだった時代がありました。こうしたことは、それぞれの先生が本に書かれていますので、それを通じて私たちも確認することができます。一方で、地球環境の時代になった今は、タブーではなくなっているのか。東大で環境学ができるのか。こうしたことを学部の1、2年生たちに問いかけるとい講義にしてみました。

今回の公開自主講座の準備会議の際に、実行委員の先生方とお話しする機会があったので、自己紹介もかねて今話をさせていただきました。そのとき、「今は、実際に環境問題あるいは環境を研究している研究者は、東大にもたくさんいるのだから、その答えはもう出ているのではないか」というご意見をいただきました。私はすぐに返事をするのができませんでした。可能になったか否かを判断する上で、まず考えておかなければいけないのは、「では、環境学とは何か」ということではないかと思ったのです。

「環境学」を定義する一つの条件としては、前半の講演の中でも出てきたと思いますが、宇井先生がおっしゃっていた「第三者はいない」ということが響いてくると思います。公害問題でいえば、被害者の立場、あるいは被害者のためにというスタンスで科学ができるかどうか。もう少し広くいうと、「市民の科学」 市民のための科学なのか、市民による科学なのかといったことについては議論があるとは思いますが、というスタンスで環境問題の解決に取り組んでいるかどうかということが、一つの基準になるのではないかと考えました。

そこで、「東大で環境学は可能か」という問いの答えについてですが、ここでは直接答えを出す代わりに、最近の大学が置かれている状況を指摘しておきたいと思います。数年前に国立大学が法人化されました。それ以降の状況は、成果主義的なものが次々と導入されています。成果を残さないと大学の中に生き残れないという状況です。若手教員の多くは期限付きの採用になってしまっており 私は幸い違うのですが、成果を出さないと残れないというシステムが強化されています。そこでの成果というのは、市民のためにどれだけ役に立ったかというようなことではなくて、論文を何本書いたか、学術誌に何本書いたか。外からどのくらい研究費をとってきたか。そういうことで測られてしまう。そういう時代になっています。ということは、市民のために、被害者のために研究をしても成果と認められない。宇井先生の時代には最低限の身分保障があって、被害者のために取り組む自由があった。それがもしかしたら、今の大学にはなくなってきているのかもしれない。そういう状況ではないかと感じています。

ここまでで終わってしまうと、悲観的な話でこれからの展望が見えませんが、最後に少しポジティブな話もしなければと思います。前半で講演をされた淡路先生が、環境学あるいは環境問題に取り組む研究者は、自分が依拠する個別の専門分野でも、その分野の中で認められるような成果、その分野の中のトップとまではおっしゃっていませんが、十分認められるような成果を出さなければいけない、とおっしゃっていました。そういう意味では、競争の世界でも認められながら、かつ市民の科学も出来るような、そういう強さを我々の世代は持たなくてはいけないのではないかと考えています。

私自身がそうになっているかということ、かなり心許ないのですが、かわりに環境三四郎の中で有望な後輩を紹介したいと思います。今日も参加してくれていますが、大竹君という最近農学部で博士を取った後輩です。彼は、ダイオキシンの環境ホルモンとしての毒性がどのように現れるかという分子生物学的なメカニズムを研究しています。まだ30前なのですが、Natureに筆頭で論文を2本も書いています。そういう意味では、圧倒的な能力があれば不可能なことが可能になるのかと、後輩を見て思っています。

私たちは、一人一人では宇井先生にはなれないとは思いますが、環境三四郎が全体として 私たちの世代から数えて、一度在席しただけというような人たちも含めると、もう250人ほどいるようです。束になれば、宇井先生一人分くらいの貢献ができるのではないかと思いつつ、何とか後に続いていければと思っています。

鬼頭 鬼頭と申します。私は、この安田講堂での攻防戦があって入試中止になった翌年、1970年に入学しました。当時から環境のことを考えていたのですが、ちょうど、宇井さんが工学部の2号館で自主講座を始めていらっしゃいました。私は結局、自主講座の実行委員会には入らなかったのですが、お客さんとしてというのは変かもしませんが、ずっと自主講座に通いました。その後も、直接宇井さんと話したわけではないのですが、絶えず宇井さんに叱られているような感じを持ち続けていました。その中で、自分が何ができるのか、悶々と悩みつつ試行錯誤を経て、最終的には今、環境倫理をやっています。

しかも比較的最近になって、実は、東大の柏キャンパスにある新領域創成科学研究科に came ました。しかも環境学ということに標榜した大学院で、東大では環境学を標榜しているのは、私がいるところだけです。私のような文科系の人間と、工学系とか、農学系とか、いろいろな分野の人がいます。

今の山下さんの「環境学があるのか」という問いは、私のように東大の環境学の教員をやっている立場からすると、「お前のやっていることは、本当にちゃんとやっているのか」ということになります。「宇井さんがずっと言っていたことは、今の東大ではどうなのだと責められているような気がして、いろいろなことを考えていました。

実は、宇井さんが残した言葉の中でも、私はやはり「第三者はいない」という言葉にずっと拘ってきました。それは私自身が、専門家というか研究者の道を選んだわけですが、しかも研究者として見るということは、それは加害者と同じなのだという意味なのです。加害者にならないような研究のあり方は何なのだろうか。被害者の立場に立つとは何なのだろうか。実はそう簡単でもないと思うのです。

現実に関、環境の運動などいろいろな活動をされている方と接触する機会があります。例えば、自然科学の中の人たちで、被害者の立場に立って一緒に運動をやられている方もおられます。そういうのを見ると、確かにそれは被害者のために科学が役に立つということもある。けれども、本当はそこで活動している人たちは、もっと違うものを求めているのではないかという場合でも、科学が入ることによって、自然科学のある分野の領域にどんどん落としこめられているような感じもします。そうすると、それは本当に被害者のための学問なのかということ、そうでもないよ

うな感じもするのです。

宇井さんの「第三者はいない」という意味は、要するに、被害者ではない。例えば、第三者に立とうという人が、公害の被害を見た時に、結果的に加害者と同じものを見ることになってしまう、同じように捉えてしまう、ということなのだと思えます。それはなぜかということ、平等に捉えようとか、数量的に捉えようとするためです。例えば水俣病であれば、被害をハンター・ラッセル症候群という枠組みで捉えてしまう。つまり、学問分野のある限られた枠組みの中で、問題を捉えようとするためです。第三者が被害を平等に、客観的に捉えようすると、ある枠組みの客観性に取り込まれるような範囲でしか見ないのです。でも、被害者が見ている被害、あるいは被害者が感じている被害「つらい」というような感情も含めてはそういうものではありません。身体全体で、あるいは歴史性のあるものでもあるし、全体的に抱えているものとして見ているのです。ところが、それを第三者が捉えようとした時に、それをある枠組みで切り取ろうとすると、結局、加害者がやっていることと同じことをやってしまうことになる。

ということは、ある特定の枠組みで切りとるというスタイルを、どこかで超えなければ駄目なのではないかということになります。一つは現場に出る。フィールドの意味はそういうことだと思えます。現場に行けば、対象がトータルに見えるような気がします。私も環境倫理をやっていますが、現場に出てフィールドでいろいろな話を聞くことや、現場に立つということが重要だと思うのです。錯覚かもしれませんが、現場に立っているいろいろな人の話を聞くと、今まで捉えていたものと全然違うものが見えてくる。さらにもう少し、当事者の人たちと心を通わせるような話をすると、段々と違うように見えてくるところがある。それがずっと生きるかどうかは難しいですが、少なくともフィールドワークや現場に立って考えることをしなければ、結局、ある特定の枠組みで捉えるということになってしまうわけです。

ところがもう一度研究室に戻ってきて、現場の経験を学問的な論文にしようすると、どんどん切り取られてしまって、またある特定の枠組みの中で捉えてしまうことになる。その繰り返しのようなどころがあるわけです。

では、特定の枠組みで捉えてしまうことを超えるにはどうしたらよいか。さきほど宮内さんが、「宇井さんが歴史性のこと言われた」という話をしました。つまり、工学から捉えていた人が、歴史ということと言わざるをえなかったわけです。学際という言い方はしたくないのですが、もっと違う領域、違う立場からいろいろなものを捉える、つまり総合的に捉えるということが必要だと思うのです。

ただし、総合的に捉えるというのは、ただいろいろな立場から捉えればよいということではありません。現場の被害者、あるいは現場でうごめいて生きている人間、その生き様、生きている個別の人間そのものの中から見えるようなものを基本的に大事にしながらか、何かを見ていくということではかありません。それは、どうやっても学問という枠の中に押し込められないようなものだと思うのです。

この困難な壁をどうやって超えるか。もし超えられれば、環境学が可能になるといえます。ただ分野が集まれば学際性などという、いいかげんなものではありません。現場か

ら見えてくるものから物事を構成して、本質を見ることができれば、環境学ができるのではないかと思うのです。かなり困難なことではありますが、少なくとも宇井さんは、工学の立場でそういうことをやってきたのだと思います。今度は私たちが、いろいろな分野の中でそれをやらなければいけない。それは多分、自らが持っている学問の枠組みを、どこかで乗り越えなければならない。

このことは、三輪さんが水俣のもやい直しの話の中で紹介された、吉本哲郎さんの「結局、学者がいっぱい研究したけれど、何も地域に残していない」という言葉にも関係します。地域の中で生きようという学問を、どういう形で作ることができるか、という問題なのです。逆にいうと、研究者・学者がそれをやらなければいけないと考えることが、ある意味非常に傲慢なのです。宮内さんが言われていた、「住民運動には科学が必要であり、住民運動の中で行うことが科学である」という「市民の科学」の可能性が、非常に重要だと思えます。

今までは、研究者・学者が現場の中で学問的な枠組で捉えて、論文や本にしていました。けれども、市民が、現場をトータルに捉えざるを得ないという被害者の特質に基づいて、自分たちで問題解決に取り組むことが必要です。それが科学にならなければならないと思います。専門家は、むしろそれをどう支援するかが問われているのではないかと感じます。その意味では、実は、「第三者はいない」ということと、「現場・フィールド」ということと、「市民の科学」ということが非常にかかわっているのです。

先ほど、友澤さんが「現場をねじ込む」ということを言われました。私たちは、例えば研究者として、第三者的に現象を見ているわけです。お茶の間で、日常生活の中で、日本で起こっているいろいろなことを見る。ある意味では、加害者が見ているのと同じような世界で見ているわけです。それに対して、「現場をねじ込む」ということは、現場の中で生きている人間が捉えるような視点から見ていくということ、言われたのだと思います。これが、宇井さんが言われたことの本質なのではないかと思えます。おそらく学問の世界でもそうです。あるいは、現場で住民運動に具体的に携わってきた時に、科学的なものを含めて現場の科学を立ち上げていくにはどうするのか。そこに研究者はどう関わるのか。こうしたことがさまざまに結びついてくるのではないかと思いました。

小林 実は、今回、実行委員の皆さんに寄稿していただいてわかったことがあります。宇井さんのアプローチは、意外な分野で、環境や公害から多少離れた分野で、実をやりつつある、価値が出てきていると思えました。というのは、ここに寄稿していただいた皆さんは、必ずしも環境や公害の専門ではありません。けれども、宇井さんのアプローチや生き方に、非常にインスピレーションを得て、それぞれの立場で活動されているわけです。それぞれの立場で、フィールドワークや現場が非常に意味を持つわけです。「現場」や「第三者」といったキーワードを、もう少し広い立場から見直すとまたいろいろな意味が見えてくるのではないかという気がします。

友澤 今の話に直接つながるかは分からないのですが、私が「現場とは何か」と考えることと、歴史の欠如をつなぎ合わせて考えないといけないと思った理由の一つに、今、

山下さんが「最後はポジティブに終わらないといけない」と言われたことが関わっています。

ポジティブは残ると思うのです。ネガティブは消えていくと思うのです。消えてはいけないはずだし、渦中におかれている方から考えれば消えるはずがないのですが、教科書からは消えていく。日常性の進行の中では、ネガティブなものは消されていく。見たくないし、考えたらつらい。苦しいし、腹が立ってしまう。

このような、見ようとしなければ消えていくものに、今、公害がされているような気がしています。環境と公害という言葉が二つあるのはなぜかということも、一つのヒントになると思っています。さきほど「1980年生まれです」と言いました。私が社会科の教科書で習う時には、「公害から環境へと、問題は広く複雑に、そして多種多様になりました」という説明で習いました。今日おられる若い方も、おそらくそう習ったのではないかと思います。それなら公害は単純なものなのかと考えると、それは違うと思うのです。「環境問題の一つが公害」という位置づけで、歴史がとても単線的に描かれてしまうということ、逆にして考えていけないといけないと思いました。つまり、「公害の一つが環境」と位置づけても考え始めることができるのではないかと思っています。

ポジティブは残ると言ったのは何を指しているかということ、環境関連の学問は発展してきたということです。環境とつく大学の学部も多いし、学会も1990年代前後からたくさん増えてきたし、環境関連の本もたくさん出てきた。それはなぜだろうと考えました。最初、本当に苦しくて腹が立って、なぜだと思っていることから始まったものが、どんどん発展していくというのはどういうことなのだろう。つまり、解決したい問題があって始まったもので、本来ならば解決したら終わりたいはずのものなのに、でも学問だけは発展しているように見える。このギャップに気づいた時に、「大学ってちょっとやばいんじゃないか」と私は思ったのです。(拍手)でも今、私は大学院生なのです。そこにすごく引き裂かれる部分があって、それを思いました。

先ほど、最首先生、桜井先生が、この場所で沖縄のことや、ベトナムのことをしゃべられました。この場所に現場をそこでねじ込まれたなという気がして、その時も圧倒されてしまいました。そういう形で言葉に力を持たせるしかないのかもしれないと思いました。学問というものに、もし一つ何か明かりを見出すとしたら、きちんとした言葉で、きちんとしたことを語るということにある。そこに歴史がなくなるといって語るにはどうしたらいいのか、ということが課題ではないかと思いました。

山下 今の友澤さんの「大学はやばい」発言と会場の拍手で勇気が出ました。先ほどの鬼頭先生のお話にどちらで切りかえそうか迷っていたのですが、やはりここ東大の安田講堂にいますので、東大の問題を東大の先生に語ってもらわないといけないのではないかと思います。鬼頭先生は、理想論できれいに回避しているのではないかという気がします。司会のお二人も東大の先生ですし、フロアにもいらっしやるはずなので発言していただきたいと思っております。(拍手)

友澤さんから、歴史の中で、特にネガティブなものは忘れられるという話がありました。宇井先生や、飯島先生、

西村先生が、ご自分の言葉で残されたからこそ、私は過去のタブーだった時代を知ることができたわけです。けれども、多くの東大生たちは、そういうことすら知らずに卒業していつてしまっているのだと思います。そういう状況に対して、それでも東大で環境学をやろうと思ったら、どういことをすべきか、何ができるか、何をしているか、という話をしていただくと、私もこの後、自分がどう進んだらいいかという時の参考にさせていただけるのではないかと思います。

井上 『キミよ歩いて考える』という本があります。この本は、宇井さんがちょうど現在の私と同じくらいの年齢の時に書いた本だということを知りました。この本の最後に何を書いてあるかといいますと、「分からない時、自分が壁にぶつかった時は、まず動いてみる。ずいぶん変化の多い道をたどってきた私が言えることは、この平凡な結論である」。

このことが私は非常に重要だと思っています。簡単にいえば、現場主義、現場に出なさい、現場から学ぼう、ということになるわけです。そこから見えてくることは、非常に多い。例えば、我々、普通に生活していると、ある人が所属する組織や、会社の名前など あの家は、悪いとかいいとか、役所だったらこうではないかとか、東大だったらこうではないか といった色眼鏡でどうしても見えてしまうところがあります。ところが、現場に行きますと、現場から見えてくることは、われわれが持っている色眼鏡とは違った動きを、その個人がどんな動きをしているのか、ということから判断できる場面が多いと思うのです。そういう意味で、これも宇井さんがおっしゃっていた「どんな立場にいても、連帯できる。協力できる。やることはある」という言葉にも繋がってくると思います。

さらに言うならば、その上で、自分たちが何ができるのかが問われます。実は、私にはかなり学生がいます。その学生たちは皆、フィールドワークをやっております。フィールドに行って、現場で悩むわけです。若い学生たちが現場で悩みます。ここに研究に来ている自分というのは何なのだろうかということ、常に悩むわけです。おそらく研究室で本を読んでいる時には、あまり悩まないことです。それが現場に行きますと、自分の人間すべてが試されるわけです。そこで悩む。そこからどうするかという話になります。研究者の現場とのかかわり方については、私の周りにいる若い人たちは常に誰もが考えているわけです。

若干違うのは、必ずしも加害者と被害者ということではないということです。熱帯地域の農山村を中心に、日本も含めて山村でフィールドワークをやる学生が多いのですが、そこでこの人たちために自分は何が出来るのか、自分がいることは何なのか、そういう悩み方をします。ですから、必ずしも加害・被害ということではないのですが、少なくとも誰のための研究であるかということ、フィールドで常につきつけられることです。昨年、そういった悩みを学生たちに書いてもらった本を出しました。『躍動するフィールドワーク』という本です。それを読んでみて改めて、この悩みというのはもしかすると永遠に消えないのではないかと思います。

では、この先どうするかということについては、例えば、大学という場で、「こうしなさい」と教えることはできない

と思います。そうでなく、悩んでいる若い人たちと一緒に、我々教員も悩む。一緒に議論していく。悩みを共有していくところから、若い人たちがそれぞれの道を見つけていくための場作りをする。それが重要ではないかと思っています。その意味で、大学は捨てたものではないというのが私の考えです。

小林 私も何が言わなければいけないと思います。特に私の場合は、環境省からかなりのお金をもらって、研究をやっています。私自身の学生にも環境問題の研究でペーパーをいっぱい書いて、有名な人になってもらいたいと思っています。というのは、これは真面目に言いたいのですが、宇井さんは自主講座開講の言葉の中で「立身出世に役立たない」と言いました。ですが、環境問題の研究が何らか世の中に役に立つとすれば、やっている人が立身出世につながっていかないと、広がっていかないと私は思っています。立身出世にもいろいろな意味がありますが、研究をやっていて良かった、研究者として良かったということがないと、環境問題の研究は進んでいかないと私は思っています。そういう意味では、環境問題をやっていて、ペーパーをいっぱい書いて、いい研究者になってもらいたいと思っています。

一方で、先ほど井上さんが言ったような後ろめたさ、こんなことをやってこの場所の人に何の役に立つんだろう、ということ を忘れてはいけないと思います。そのことは極めて大事です。私の学生もベトナムに行ったり、中国に行ったりして仕事をしています。ですが、そんなことをしてその場所の人に何か役に立つのかと考えてしまうと、それはなかなか難しい問題で、容易には解決しないと

思います。先日、新聞を読んでいましたら、ある女性で、イスラエルのパレスチナ人とユダヤ人が住んでいる場所しばらくおった方が、こういうことをパレスチナ人に言われたという記事が載っていましたので、紹介したいと思います。「ものごとを中立に見るのではなくて、両側から語れる人になって欲しい」ということを言われたらしいのです。中立に生きるということは、特に、イスラエルの場合はあり得ないのだと思います。そのため、「両側のことが少なくとも分かる人になってもらいたい」と言われたのだと思います。私も、私の学生にはそういう風になってもらいたいと思います。それぞれの立場があるけれども、両方の立場がきちんと把握できるということが、最低限必要ではないかと思っています。

鬼頭 私も答えなければいけないと思っているのですが、どちらかという山下さんはかなり挑戦的に言っていて、大変良かったと思っています。

山下さんが言われたとおりで、私は非常に理想論的な、きれいごとを言ってきたのですが、今の東大を見てどうなのかということについては、いろいろ考えることはあります。ただ、現実には、単なるきれいごとでなくて、今私のいるポジションで考えているわけです。別の言い方をすれば、私がまさか東大の教員になるとは思いもしなかったのです。一つはおそらく環境倫理という言葉が、何だか分からないけれども、魔力を持っていて、どうやらそういうものは必要だから欲しいということになった。しかし、少なくとも理系との関係で環境倫理を議論できるような研究者がいない。仕方がないので私が教職に就くことになったと

思うのです。けれども、逆に私は今どう自分のポジションを捉えようかということ、非常に悩んでいるところです。

埼玉大学の共生社会研究センターに、宇井さんの所蔵されているいろいろな資料がぜんぶ寄贈されて、宇井文庫ができました。開設記念で、宇井さんの講演とシンポジウムが行われました。そこで私が指名されて、宇井さんの業績を紹介しながら、現代的な意味を話しました。その時は、私は恵泉女学院大学の教授という立場で気が楽だったのですが、いざニュースレターをまとめるから書けとなった時に、東大の教授になっていました。東大の教員が宇井さんについて書くというのは非常に違和感を持って、変なことを書いた覚えがあります。

その時に感じたことで、今も感じていることですが、東大全体としては、どう考えても今の状態には異常な部分があると感じています。かつて、宇井さんが東大に対して向かっていた時の構造とも全く違うわけです。昔は産学共同などということは、それ自体が最初から問題だったわけです。今は産学協同をやらなければいけないという、構造的に逆転した状況の中にいます。また、先ほども出しましたが、非常に競争社会で、外部資金を取ってやらなければいけないという状況もあります。

ただ、その中で環境学というところは非常に特異な位置にあります。学問分野が非常にきっちりしたところだと、方法論が決まっているのでそこで競争社会で評価されて、教育されるということになります。一方、環境学というのはわけの分からないものですから、いろいろ分野の人がいるので、東大のいいところでもあると思いますが、お互いの分野を尊重してあまり侵害しないという部分があります。ですから、勝手なことをやっても平気でいられるというところがあるのです。つまり、今まで東大型の学問の基準では研究にならないとされていた研究に対して、東大の教員になったら、それをきちんとサポートすれば、学位を出して学問として位置づけることもできるわけです。そういう形の役割が、もしかしたらできるかもしれないと感じています。

良いか悪いか分かりませんが、私の研究室は、東大からは誰も受験しません。文学部や農学部で教えていても分かるのですが、やはり東大生の皆さんは、宇井さんの言葉にもありましたが、立身出世のための学問という、何かそれなりの形になるものを求めます。ところが、私のところは何だかよく分からないので、そういうところは自分がやるべきではないと、おそらく皆思うのです。私の研究室には、女性が多いです。男の子は、何かそれなりに形にしなければならぬと思うようです。一方、女性は自由です。自分がやりたいことはストレートにやりたいという感じです。結果的に、東大生は来ないで、女性がどんどん多くなるという、非常に奇妙な状況です。この状況の中で、これからどういうことになるのか、非常に面白いです。

現実には、私が思ってもみないような勢いで、どんどん皆さん研究しています。その結果、今までの学問の壁を壊すことになるかどうかは分かりません。ですが、私よりは若い人のほうがいろいろなエネルギーがあるので、少なくともそれをサポートすることぐらいはできるのではないかと思います。逆に、学際的な領域だとできないことはない。だから、最終的にはそういう隙間産業のようなところを狙

って、東大の主流なところでは巨額な額が動いているはずですが、その中でどこまで生き延びられるかというのを、やれるところまでやってみるとするのは面白いのではないかとというのが実感です。

山下 ありがとうございます。だいぶ具体的なイメージまでお話しただけだったので、私も先ほどよりは、ポジティブな印象が持てるようになりました。

鬼頭先生がおっしゃっている方向性については、本郷から離れて柏に行っているということが、踏ん切りをし易くできる要因の一つではないかと思えます。でも、今おっしゃっているのは、一個一個の研究室、自分のゼミの中でという対応だと思えます。けれども、組織としてみたら相変わらず東大だとすると、そこには相変わらずの限界が残ってしまうと思うのです。本郷にいて、最初に流していたビデオの中でも宇井先生がおっしゃっていましたが、「国家鎮護の大学」というイメージが付きまどってしまいます。けれども、同じ東大でも千葉県のほうに離れたので、その自由度を生かして、柏キャンパスの環境学は、皆で宇井先生の言葉で言うと「けつをまくって、企業のための科学ではなくて、市民のための科学をやるキャンパスにするのだ」というような方向で、実験的取り組みをしていただくと、もう一つ違う東大が出来てくるのではないかと思います。昔そこにいた人間としては、そういう期待を持って、柏キャンパスを見ております。

小林 そろそろ東大の問題は止めにして、宇井さんの「現場主義」とか、「フィールドワーク」とか、そういった方向の話をしてしまおう。もういろいろなことを言いたくてうざうざしている方がだいぶおられるのではないかと思います。

堀口 国立環境研究所の堀口です。私も宇井先生には学生の頃からお話を伺う機会が何度もあって、ずっと尊敬しておりました。改めて思いますが、宇井先生は、「問題解決型学習」ということをよくおっしゃっていたと記憶しています。それは、ある問題を公害問題、環境問題等だと思えますが、解決するために学問がある、と先生はお考えだったのではないかと私は理解していました。だとすると、ある具体的な問題がある以上は、当然そこに現場があるわけで、室内で考えていても分かりきらないので、現場に行くのは、必然ではないかと思えます。そこで暮らしている、もっというならば、いろいろな問題を日々背負い込まされている人たちと同じ目線となるべく立とうとする。それが、例えば、被害者の総体的認識を共有しようとする試みであったり、努力であったり、そういうことの繰り返しが必要だ、大事だということを、先生はおっしゃっていたように思えます。ですので、現場をねじ込むということも必要なかもしれないですが、具体的な問題解決ということを考えれば、当然、そこに現場があるので、「現場主義」というのは至極もつともなことではないかと、私は思います。

先生が別の機会におっしゃっていたことは、今の学問というのは細かく切り刻んで解析をしていく。それは、原田先生がおっしゃっていたことと通じるかもしれませんが、ある断面、ある部分を切り取ってみせることである。したがって、それをもう一度再構成して、全体として見渡すことが必要だということも、先生はお話し下さいました。それが、いわゆる学際的な協力ということになるのかと私は

想像して聞いていました。そういう考え方でいくと、宇井先生が残されたたくさんのキーワードが有機的に繋がってくるのではないかと思います。

私も研究者のはしくれですから、論文書けと言われますし、書かないかと思えます。税金を使ってやっている以上は当然ですが、ただそれは立身出世のためというよりも、学会などで一定の成果を認められることによって、それを背景にして社会的な発言力を増す。そのために必要なのではないかと私は思っています。

あとは、ぜんぜん違う話で恐縮ですが、今回の会がこの安田講堂で開かれることが不思議で、違和感を覚えています。宇井先生が自主講座を開かれる時も、大変なご苦労があった。圧力というか、抑圧というか、様々なことがあった。その宇井先生を偲ぶ会が、ここですんなり開かれる。もちろんすんなりではなかったかもしれませんが、その辺のいきさつを是非教えていただきたいと思えます。

小林 最後の問題ですが、ここが東京大学の中で一番大きい会場です。今日来ておられる方がぜんぶ入れる会場は、他にありません。私は単に、1000人以上は来るだろうと予想して、というだけの話です。申し訳ありません。でも、これだけの人数が来て下さって、非常にありがたく、ここを借りて良かったと、私は単純に思っております。

山下 小林先生、今の点だけ補足です。先ほどお話しした「東大で環境学は可能か」というテーマで、西村先生や、できたら最首先生も呼びして、パネルディスカッションをしたいということ、生前に宇井先生とご相談させていただいたことがありました。「いい企画だから僕は協力するよ」とおっしゃったのですが、最初の条件が、「場所は安田講堂をとれ」でした。ですから、私は宇井先生のご遺志だと思っています。

小林 私も実行委員をやっていたから、ぜったい宇井さんはここをとるだろうなと思いました。だから、私はこの場所を使うことは、何の疑問もありませんでした。

佐久間 私は東大の医学部の助手を20年やっていました。宇井さんと、最長助手期間を競ったものです。宇井さんは、私が50に近づいた時に、「まだまだ佐久間君、今辞めたら何も見えないぞ。あと5年くらいがんばれ」と言ってくれました。その一方で、朝日ジャーナル等に「医学部、医学部といえば、佐久間君。あれは万年助手に間違いはない」というように烙印を押してくれた。そうこう言っているうちに沖縄に行かれたのです。自分は教授になられていないなあと思っていた次第です。

私は、当時、環境というのを医学部保健学の学生でぜんぶやりました。まず、こういった大量消費、大量廃棄でよいのだろうかという疑問があったわけです。私の田舎は千葉県君津市で、首都圏に山砂を大量に持ってきています。羽田第三次拡張、また3千万立方メートル。これからの2年間でやられます。その頃、ごみから、下水から手がけたのです。学生も下流意識がなかったのです。東大まで来てごみをやる、下水をやるのは情けないということを学生は言いました。ところが、その方々が数年たちましたら、三井三菱系の研究所に行くということ、年賀状で知らされました。時代が変わってきたのです。一方、企業がなぜ参加しないかということ、早稲田の寄本さんとやって、私は日米のごみの比較研究をしました。しかし、急激に変わっ

てきて、企業も参加してくれるようになりました。

私自身がやったのは、千葉の山砂問題のことです。最初、社会調査をしました。学生を連れて行って。そうしたら、学生は「ひどいものでこれこそ科学ではないか。先生、逃げ腰でなくてやりましょうよ」と言ってくれました。一方、事業側は、「あれは赤の学者。社会調査は、赤の学者がやればどうにでも結論が出る」と言うのです。惨憺たるものがある。そのような結果は、岩波新書の『ああダンプ街道』に書きました。20年後に『山が消えた』という残土と産廃戦争について書きました。一冊目はよく売れましたけれど、20年後の『山が消えた』は、岩波は増版をしてくれなくて、それっきりになっていますが、すべてそこに書いてあります。

それで、一つ気になりましたのは、「第三者はいない」ということです。宇井さんは、まず千葉の現場に来てくれました。東大で私の博士論文もダンプで書きました。けれども、その時も評論はしますけれども、断定しますのは東大の先生。一方、京都学派ですね、京大から始まって関西医大、みんな公衆衛生の人たちが来て、現場を見てくれました。一人の方など、「あなたの努力で、こないだ行ってみたらほとんど公害はなかった」と言って下さいました。日曜日だったのです。日曜日はダンプが走らない。それから、私は公害の委員にも加わりましたが、居たたまれない。私に重大情報は流してくれないというようなことで、苦労したこともございます。

第三者はありえないということで、言及しますと、まず被害者はほんの少数です。この近代文明の華やかな裏には必ず被害者がいる。その被害者はしわ寄せです。地理的に言えば、沖縄がそうではないかという気がしてなりません。第三者は少数者ですから、反対者の意見が結集しないのです。それを多変量解析でがっちり分析しました。それを傍観している同じ集落の他の大多数の集落民がもみ消してしまう。企業は圧倒的に強い。議会の握っていますから。だから、第三者であるということは、強い企業を勝たせることになってしまうのです。だから、黙っていることはエゴイズム。

振り返ってみますと、私はこの学校を逃げ出したい時に、筑波の環境と、東工大の華山謙さんのあとがあいたのですが、それはあっさり決まってしまうと、応募しても駄目だったのです。考えてみると、当時、環境にセンシティブな学者はあまりいませんでした。なぜか。それは東京大学は帝国大学だから。福祉はありませんでした。福祉専攻はないのです。それ見て、環境をみると、これは強者の帝国主義の大学が厳然として残っていると思えました。それから一次安保をやった医学部の先輩たちにききましても、ちっとも変わっていない。もっと悪くなったという。昨今の学者の動向をみても、人間は結局エゴイズムだ、自分が良ければいいのだ、と感じます。それを私は放置できなかった。宇井さんもおそらくそうだと思う。特に許せなかったのは、学者がもうかればいい、収入が多くなればいいと、走りがちなことです。これは、エゴイズム、人間のエゴイズムというものだと思う。だから第三者は有り得ないという裏には、痛烈な人間のエゴイズム、学者も含めて、への意見があるのではないかと感じました。

遠藤 水保で水俣病を訴えることを仕事にしています、

遠藤といます。友澤さんの発言に目からうろこが落ちました。ネガティブなことは歴史に残っていかないという。ところが実際に起きていることはネガティブなことが多いわけです。どうしても皆の記憶にとどめようと思って語る。では誰が語るかという、自分の悩みみたいなものがあります。例えば、水俣病の人が水俣病を語るというのは、誰も不思議に思いません。では例えば、相思社に勤めている、水俣生まれではない、私というの一体、誰なのかという疑問が常々あります。この間も職員で話していたのですが、僕はよく支援者と呼ばれてきたわけですが、僕はあまり支援した覚えはないのですが。そうすると、水俣病にとって、当事者とは誰なのかという、簡単な疑問にうまく答えられなかったのです。つまり、水俣病の患者、被害者が当事者というのは誰も反対しませんが、では当事者のスタッフは、当事者なのかと言われると、考えてしまいます。例えば、水俣病に関心を持たれている方や、現場を訪れた方は、大勢いらっしゃると思います。ではこの人は誰か。さきほどの「第三者はいない」という話とはつながってはいないのですが、自分のスタンスは何なのだろうと、いつも感じています。さきほどから吉本哲郎さんの名前が出ていますが、僕は1990年代ぐらいまでは、水俣病運動を支えるということのできたので、支援者でも不思議ではなかったのです。それ以降は、よく考えてみればあまり運動も支えていないし、自分たちが伝えたい水俣しか伝えていないではないか。そう思うと、いったい自分たちの名づけをどうするか、あまりうまい言葉が出ていないのですが、友澤さんの言葉で、自分たちなりのポジティブな言葉を作り出したいなと思いました。

とみた とみたと申します。宇井さんが沖縄に去った後の自主講座に、高校生の時に参加しておりました。東大生ではないのに東大に入って自主講座を学ぶというのは、本当にいいことだ。市民のために開かれた講座であると、私はとてもうれしく思っておりました。

今、私は某商社の子会社の派遣で働いております。その商社と申しますのは、もちろん商社でありますので、いろいろなものを取り扱っています。戦争の道具ですね。それから、環境排出。環境にやさしいもの、環境に悪いものを他のところが代替わりして、それをお金で取引するかというようなこともやっております。環境ビジネスを商社がもてはやしているわけです。環境はこれから売れるから、もてはやされるから、どんどんやっつけようということをやっています。なおかつ、原発を作ったり、戦車を作ったりしているわけです。

環境を考えていること自体はいいことだと思っています。ただ立身出世、それから企業がもうかるとか、環境を売り買い、お金で取り扱うことを、一体どう思っているのだろうかということを知りたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

小林 例えば、京都プロトコルみたいなものがあります。要するに排出権取引などです。これについてはどう思われますか。ある意味では非常に経済的にもうまくいって、CO2排出量を減らす仕組みであると考えられていますね。

とみた そうですね。それはそう思っています。ただ大商社の派遣で入っていて、派遣でものを言うので、あなたは首を切るよと言って、首切られてしまうのです。企業が

環境で儲かるとシステムができつつあるわけです。京都議定書ができて、どんどん減らしましょう、という状況になったのです。それに対して、それは減らすためには仕方ないよ、ということではいいのかということが、自分の中では疑問です。大企業は、そうやってお金を儲けていて。

小林 本当に環境にいいことであればいいと思いますが、中には環境にいいからということで、地元の住民の人を無視したような政策が行われるということが結構あると思います。特に、発展途上国では意外とあるのではないかと思います。

井上 やはりそれこそ、現場、フィールドで見ていくことが重要だと思っています。企業がやることだからいけないということではなく、現場で見て、そこで判断してく。例えば、NGOでも企業でも一緒ですが、そこでやっていることが結局どのような意味を持つのか。特にそこで住んでいる人々の生活がもともとあるわけですから、そこでどういう意味を持つのかということ。企業であろうが、NGOであろうが、学者だろうが、そこでちゃんと見て、発言していくということ。そう私は思っています。先ほども言いましたように、決して、所属などで色づけて、最初からこれはいけないと決めつけるべきではないと、思っています。

小林 そこが、宇井さんがやったことだと思うのです。社会党だから、組合だから、というのではなくて。「あんた、おかしいんじゃないの」という。世の中のいろいろな、何とか主義とか、何とか党とか、そういうものがありますが、それを公害の現場でよく見て、おかしいものは、「おかしいんじゃないの」と、ちゃぶ台をひっくり返した。そういう所が宇井さんのインパクトが一番あったところだと思います。そのことを今、井上さんが言ったわけです。やはり、その場所で何が起きているのか、ということが一番大事なのではないでしょうか。

? 昔、駒場の自主講座をやっていたものですが、今の彼女の疑問が、漠然と分かったような気がしました。本当は、根本的な仕組みから、もっと公害を出さないとか、もっと環境にいいように、最初から仕組みを変えるべきです。にもかかわらず、そこには目をつぶって今までのシステムをそのままにした上で、排出された環境に悪いものをなくすシステムを、また新たな産業として考えているということが、いかがなものかということではないかと思っています。そうすると、永遠に問題が再生産されてしまいます。今の人に優しくない仕組みがあるのにもかかわらず、その部分には目をつぶったままで、結果的に出たものだけを対象にして、新たに産業化するというのはどうなのだろう、ということではないかと思っています。

友澤 その通りだと私は思います。さきほど、公害や環境の研究をすることが儲かればいいのかと思っているという、小林先生の提議がありました。たぶん今は、もうかるのです。では、儲かっている部分というのは、何かということ、問わなければいけないのではないかと思ったのです。

今の商社で働いておられる方のお話を、もっと聞いてみたいと思いました。環境という言葉はずっと使っていますが、環境だけではなく戦争の話が、根本では資本を制覇している、動かしています。そこから考えない限り、科学技術がどんどん発展して、戦争のためにいろいろなものが出

来て、そこからまた物質が出て、また問題が起きている。それを解決すると言って、環境学が発展していくという構造がおかしいと思います。

その意味では、儲かれば良いということについては、しっかり考えなければいけないと思ったのですが、いかがでしょうか。

小林 儲かるようになっていくこと自体は良いということなのです。例えば、排出権取引もうまくいこうに見えますが、それが根本的に温暖化を解決する、それだけで解決するわけではありません。当然、言われたように、基本的な仕組みを変えていかなければいけないことは確かです。ただ、みんなも分かっている、そちらのほうにともかく動いていくことが大事です。もちろん多様な意見があるのはすごく大事です。とりあえずはこういう方向で、でも大きくは社会全体を変えていかなければいけない。そういう方向で話がまとまっていけばよいのではないかと考えています。

? すみません。もう一言、言いたいのですが。私は、79年度から83年度くらいまで駒場で自主講座にかかわったものです。その頃から、今、言われていたことは言われていました。適正技術、オルタナティブ・テクノロジーということも、テーマにあげてきました。けれども、仕組みは、相変わらず25年たっても変わっていません。何が変わったのかというと、儲かるシステムというのか、元々80年代から仕組み自体はそれほど変わっていないということで、何だかさみしい気持ちになります。だから、心の問題とこのあるのではないのかと思います。このまま放っておくと、儲かる部分と、さきほど友澤さんが言ったように、実際は現場ではなく学問だけ華やかになって、企業の欠陥をまた産業化するような感じで。もっと皆で考えなければいけないのではないかと考えたのです。

原科 どんどん儲かれば良いという発想になりすぎです。村上何某は、「お金儲けしちゃう悪いんですか」と言いました。我々もそれはそうかなと思いましたが。でもよく考えると、ただ儲かれば良いというものではない。やはり、我々は持続可能な社会を作るために、ライフスタイルを変える、社会システムが変わらなければならない。だから、今、女性の方がおっしゃった通りです。

友澤さんも、環境の一つが公害ではなくて、公害の一つが環境だとおっしゃった。私は、最初は変だと思ったのですが、今日の議論を聞いてみると、そのとおりだと思います。やはり公害の一つが環境です。では、公害とは何かという定義の問題ですが、これは社会のシステムから生まれてくるネガティブなインパクトだと思います。それをトータルで考えたら、公害とはやはり環境です。環境に出てくる。

私は名前を言い忘れましたが、東京工業大学の原科といいます。『環境と公害』の同人の一人です。たまたま1965年に、私は東京工業大学に入学しました。その年に、学校祭で、各クラスが展示をやりました。私のクラスは公害を扱いました。その時は、庄司先生、宮本先生が書かれました『恐るべき公害』を読まさせていただいて展示をしました。その時に、私はどういうわけか、公害の一つに満員電車を取り上げたのです。すると、友達が、「なんだお前、そんなのを取り上げるんだ。変じゃないか」と。でも、「まあいい

や。それぞれやりましょう」というので、満員電車を取り上げたのです。今思うと、満員電車もそうなのです。巨大化した首都圏の社会のシステムがおかしいのです。そういった根源的な問題を解決しなければならない。そのためには、考え方、マインドを変えなければいけない。私は、ハード、ソフト、ハートといえます。ハードウェアを作る、ソフトウェアを作る、もう一つ、ハートウェアを作るということです。マインドウェアを変えなければいけないと思います。そういう意味で、ただ単純に儲かれば良いということではないと思います。儲けることは必要ですけど、適切に儲けるということです。必要以上に儲けることは、他の人の行動の自由を阻害することになります。これは良くないと思います。

? 今日は、6月23日です。戦争は最大の環境破壊。公害もそうですが。宇井純先生は、沖縄で教鞭をとっていらして、尊敬しております。皆さんに是非沖縄のことをお話ししたい。特に辺野古です。V字型滑走路を作られますと、本当にあの環境すべてが破壊されます。そして、大浦湾は水深が深いので、逆L字型に滑走路を作りますと、大型軍艦が頻りにやってくる。ということは沖縄から再び世界へ、今もそうですけども、戦争に出かけることになる。その加害にさせられる。

どうか先生方、皆さんで沖縄に、辺野古に熱い関心を寄せて下さい。私は、沖縄戦の生き残りの一人です。是非作らせてはいけないということでもよろしく願います。

小林 ありがとうございます。ディスカッションをこれで終わりにしたいと思います。

井上 それでは最後になりますけれども、閉会の挨拶を、共催者であります日本環境会議代表理事、元滋賀大学学長、大阪市立大学名誉教授であります、宮本憲一さんをお願い致します。

宮本 今日は、宇井君の望んだ、この安田講堂に、約千人の方がお集まりいただきまして、最後、なかなか白熱的な、心を揺るがす討論をしていただきまして、共催者を代表致しまして、心からお礼を申し上げます。

私は閉会の辞でしたから、40年にわたる宇井君の友情や、論敵でもありましたから、そういうものを回顧して結びにしようと思っていたのですが、今のディスカッションにかなり刺激を受けましたので、そのことは資料に書いてあることをお読みいただくことに致しまして、少し感想めいたことを申し上げて、終わりにしたいと思います。

おそらく、宇井君が生きて聞いていたら、「俺の言ったことがやっと分かったか」ということと同時に、「まだ分かっていないのか」と、おそらく両方の言葉が聞けたのではないかといいながら聞いておりました。ここには、原田さんや淡路さんや、長い間一緒に40年にわたって公害を研究してきた仲間がいます。公害を長い間研究してきた私たちが言わせれば、公害論が分からなくて、環境論ができるはずがないのです。確かに環境問題は非常に広い。景観の問題だとか、アメニティの問題だとか、地球環境問題だとか、非常に多様です。けれども、その多様な環境問題の本質というのはどこにあるのか。今の社会経済システムが進行する限り、なぜ環境破壊が起こるのか。なぜ被害が弱者に起こってくるのか。こうした環境問題の本質は、公害問題論から解けるわけですから。公害問題論という本質を究めて、

それを更にいろいろな新しい側面の問題に適用し、あるいは発展させていかなければならないのです。環境問題は公害問題と違うとか、公害問題は終わってしまった、これからは環境問題だ。そんな姿勢で環境の科学ができるとは、私は思いません。それが宇井君の遺言だったのではないかと思います。ですから、今日聞いていて、若い人たちが何だかふにゃふにゃと言っているのが、大変気になって、もうちょっとちゃんと公害論を勉強してくれと思ったのです。

というのは、私は、今、アスベスト問題を調査しています。ご承知のように、私はだいぶ前からアスベストについては警告を発していましたが、政策がぜんぜん動きませんでした。2005年の6月に、三人の非常に勇気のある住民が、自分の中皮種の被害はクボタのアスベストの被害ではないかと告発をしたことによって、日本国中がアスベスト問題に取り組むようになったわけです。私はそれを聞いた時に、非常に衝撃を受けました。分かっているけどもつとやらなかったのだろうかという後悔もありまして、すぐに支援団体や被害者に会い、それからクボタの企業に行き、尼崎の市役所に行き調査をしておりました。

現場の人たちに会って話を聞いたのですが、その時に、支援団体の関西労働衛生技術センターの片岡さんという事務局長に、嫌なことを言われました。「実は、この問題が起こってから現場に調査に来たのは、先生が初めてです。年をとった先生が来るとは、思っていなかった。これが60年代の終わりや70年代だったら、私のセンターに大学院生や若い研究者が殺到したでしょう。『何かお手伝いできませんか。実態はどうなっているのですか。調査させて下さい。』と言ったであろうが、全然来ない」と言うのです。その時、彼が「40代、50代の先生が今、大学で何を教えているんでしょうね」と言ったのです。私は「今でも、40代、50代の先生もちゃんと教えているよ」とは言ったのですが、それで随分考えさせられました。さきほどの現場主義ではないのですが、コンピューターを眺めていて論文を作れると思う環境論者は非常に大きな間違いでしょう。

私は、少し腹が立ったものですから、環境経済・政策学会の10周年記念講演で、そのことを率直に若い人たちに訴えました。そのお陰で、関西で数人、大学院生が手伝ってくれるようになりまして、今の若い人たちも分かっているものは分かっているのだと思っています。それにしても、そういうことが通ってしまうようになっているところに、やはり今の学术研究に問題があることは間違いありません。『公害原論』がここで開かれた時に、おそらくそういう問題を宇井君は語って見たかったのではないかと思います。

今日は時間がもうございませんので、最後に申したいのは、今、日本の高等教育と学术研究は、歴史的に最大の危機にあります。私は学長でしたから、特に実態が分かっていますので、感じています。今、GDPに占める高等教育の公的支出は、日本は0.5%しかないのです。欧米は全部1%以上、あるいは1%に近い値です。一番少ないイギリスでも0.9%ぐらいです。その極めて貧困な金額を土台にしながら、先ほどから出ているように、競争的資金ということで、私が学長の時にも法人化に反対したのですが、通ってしましまして、毎年1%ずつ、国立大学の予算は減らされています。少ないところから、ますます減らされていくわけですから、つぶれる学部がでてくるわけです。今

度の競争的資金になりますと、これは7帝大に集中します。そうすると地方の大学は、止めてしまわなければいけない研究、止めてしまわなければいけない学部が出てくると思っています。それでいいのかということなのですね。日本の未来とか、維持可能な社会の中で一番重要なのは教育です。特に、前進を図ろうとすれば、高等教育こそ最も重要なのです。しかし、その事態を基本的に議論しないで、競争原理だ、もっと外から資金を獲得せよ、としてしまいますと、公害問題や環境問題は、今、ちょっと環境問題は花形になっているようですが、おそらく切り捨てられていくでしょう。そういう意味で、学术研究、高等教育は、今、日本で本当にピンチの時代に入っているわけです。この東大自身も東大が世界一になればいいと思っているかもしれませんが、それで日本の学术研究や高等教育が良くなるわけではない。東大は日本の大学の中心として、日本全体の学術教育を前進させる、そういう責任をもっているだろうと思うのです。是非若い人たちが安易に産学協働、あるいは、最近では、軍学協働に成り代わって、防衛庁は予算を持っていますから、そういうことになるということにならないように、それが今日の宇井君に学ぶことではないかということで、終わらせていただきたいと思えます。どうも今日は、ありがとうございました。

(2007年6月23日、東京大学安田講堂にて)